

郷土大観

徳宿 克忠 著

本書は本校ノ教育ノ参考資料トシテ編纂シタル私書ニ過ギズ 不完全ハ素ヨリ期スル所ナリ
然レド訂正加補スベキ点ハ機会アル毎ニ之ヲ怠ラザル可シ

記事ノ精粗 綱目ノ序列 素ヨリ幾多ノ欠点アラン 本書ノ性質上之レヲ諒トセラレヨ

本書編纂ニ際シ 彼此参照シタル書類概ネ 次ノ如シ 特ニ 磯浜女子尋常高等小学校編磯浜誌及磯浜尋常高等小
学校編 磯浜地誌ニ負フ所頗ル多シ

参考書目

新編常陸国誌 波山始末 三浜誌 東茨城郡大勢 磯浜地勢一斑

願入寺縁起 磯浜地誌 磯浜誌

参謀本部陸地測量部地図

水戸測候所報告書類

町役場調査書類

目次

第一編 自然界

第一章 地所

- (一) 境域
- (二) 廣袤
- (三) 面積
- (四) 地勢
- (五) 土性
- (六) 地目
- (七) 動植物

第二章 水界

- (一) 海
- (二) 川

第三章 氣界

- (一) 氣候
- (二) 風力
- (三) 風向
- (四) 平均気温
- (五) 最高・最低平均温度
- (六) 晴日数
- (七) 降水日数

第二編 人文界

第一章 戸口

- (一) 人口
- (二) 戸数
- (三) 職業別戸数
- (四) 祝町職業別戸数
- (五) 元禄以降の戸口

第二章 政治及自治

第三章 教育

- (一) 学校 沿革
- (二) 教育費
- (三) 職員

第四章 神社 仏閣

- (一) 大洗磯前神社
- (二) 天妃神社
- (三) 沖の州稻荷
- (四) 願入寺
- (五) 西福寺

第五章 教化

- (一) 大洗矯風会
- (二) 磯浜青年団
- (三) 磯浜図書館
- (四) 青年親交会
- (五) 労働矯風会
- (六) 帝国在郷軍人会
- (七) 明治三十七八年戦役戦病死者
- (八) 壮丁
- (九) 慈恵
- (十) 祝町矯風会
- (十一) 祝町文庫

第六章 祭 禮

- (一) 鎮守祭
- (二) 八朔
- (三) 神幸祭

第七章 沿 革 一・二

第八章 人 物 一・二

第九章 官 公 署

- (一) 茨城県立水産試験所
- (二) 漁業組合事務所
- (三) 巡查部長派出所

- (四) 磯浜築港工務所
- (五) 磯浜郵便局
- (六) 大洗郵便局
- (七) 磯浜町役場

第十章 磯浜築港梗概

第十一章 名勝及旧跡

- (一) 大洗
- (二) 子の日の野
- (三) 磐船夕照
- (五) 鳴瀧万助

- (六) 那珂川 其他

第十二章 交通 運輸

- (一) 道路
- (二) 橋梁
- (三) 渡船場
- (四) 人力車
- (五) 客馬車
- (六) 汽船

- (七) 貨物の輸出入

第十三章 經 済

- (一) 明治二十七年年度以降町村経済
- (二) 租税
- (三) 町税
- (四) 祝町に於ける郵便

- (五) 電話
- (六) 貯金
- (七) 産物
- (八) 漁業
- (九) 休日制度

第十四章 風俗 習慣

- (一) 十夜
- (二) 出初
- (三) 大般若
- (四) 節分
- (五) 潮祭

第十五章 言 語

- (一) 方言訛語

- (二) 俗 謡

手鞠歌 羽子歌 子守歌 ケンノカケ聲

(三) 歌謡

第十六章 雜

(一) 衛生

(二) 消防

(三) 海水浴

第一編 自然界

第一章 地界

(一) 境域

磯浜町ハ東茨城郡ノ東端ニ位シ北ハ那珂川ヲ隔テ、湊町

ニ対シ東ハ太平洋ニ面シ 正南ハ鹿島浦ヲ控、鹿島郡ト相對

シテ袖ヶ浦ヲ為ス 西南 大貫町ト家屋ヲ相連リ、西北 涸

沼川ヲ挟ミテ下大野村ニ接ス 東經百四十度三十五分五十

六秒ニ起リ東經百四十度三十五分五十秒ニ至ル 北緯三十

六度十八分十一秒ヨリ北緯三十六度二十分ノ間ニ位ス

(二) 廣 袤

東西 二十五町十間

南北 二十二町三十間

周圍 二里三十一町六尺一寸

(三) 面積

四百六十四町六反四畝

民有地 町村有 社有 寺有 県有 国有デ合セテ

約三百八十町余 *私有地租反別

次頁ニアリ

官有地 二十二町六反九畝二十一步

御料 七十四町二反八畝十八歩

民有 七十五町一反〇畝十三歩

(四) 地 勢

一般丘陵ニシテ 海岸及河流ニ沿ヘル地及西部ノ地平坦ナ
リ

丘陵平均ノ高ハ約二十五米突ニシテ 最高地ハ東方子日原
ニテ三十米突 西南方 富士山ニテ三十六米突入

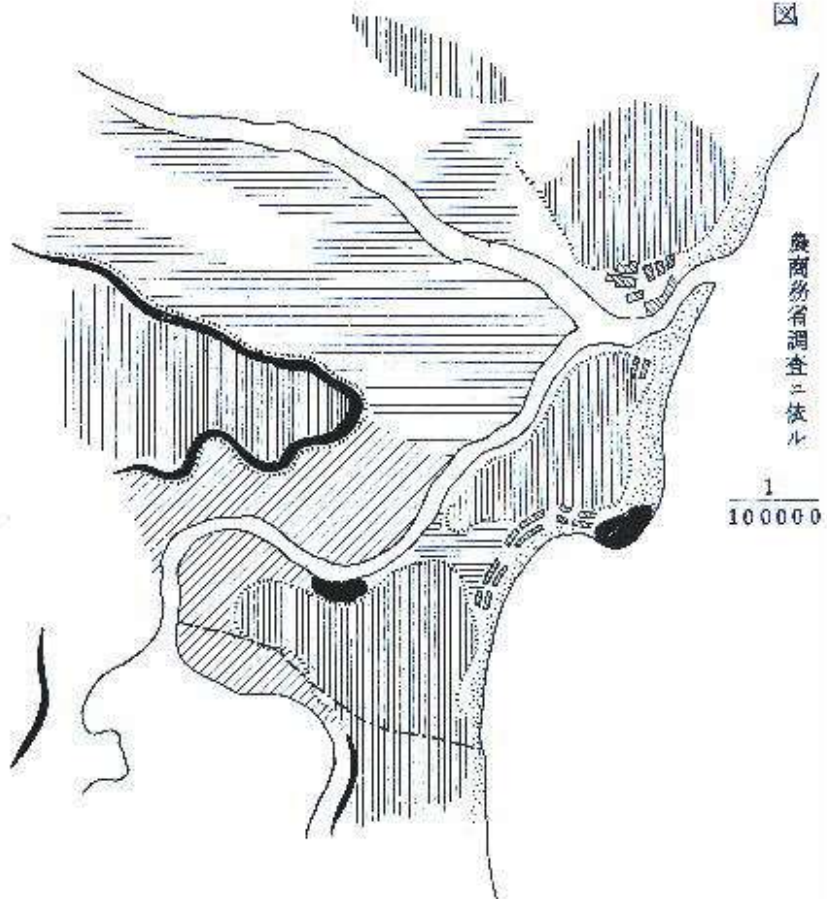
(四) 土 性

別図参照 (次ページ)

上
性
区

農商務省調査ニ依ル

1
100000



土 壤
層古紀四第

土 壤
層新紀四第

土 壤
層新紀四第

岩成水
層紀三第

(六) 地目反別

	反別	地価
田	三九七三畝二十	一三八四七円四二〇
畑	一八五九五・〇四	一八八六九・五四〇
宅地	一一八七三七・六九	一一八九二六・八八〇
山林	一五九〇・一五	九六・三二〇
雑地	四一八・二四	四九〇九〇
原野	四八四・一九	六八五〇・三七〇
ノ	二五〇五九三三 一五二七九六一〇〇	
		四五一九二〇〇

田畑林野分佈圖



草地



針葉林



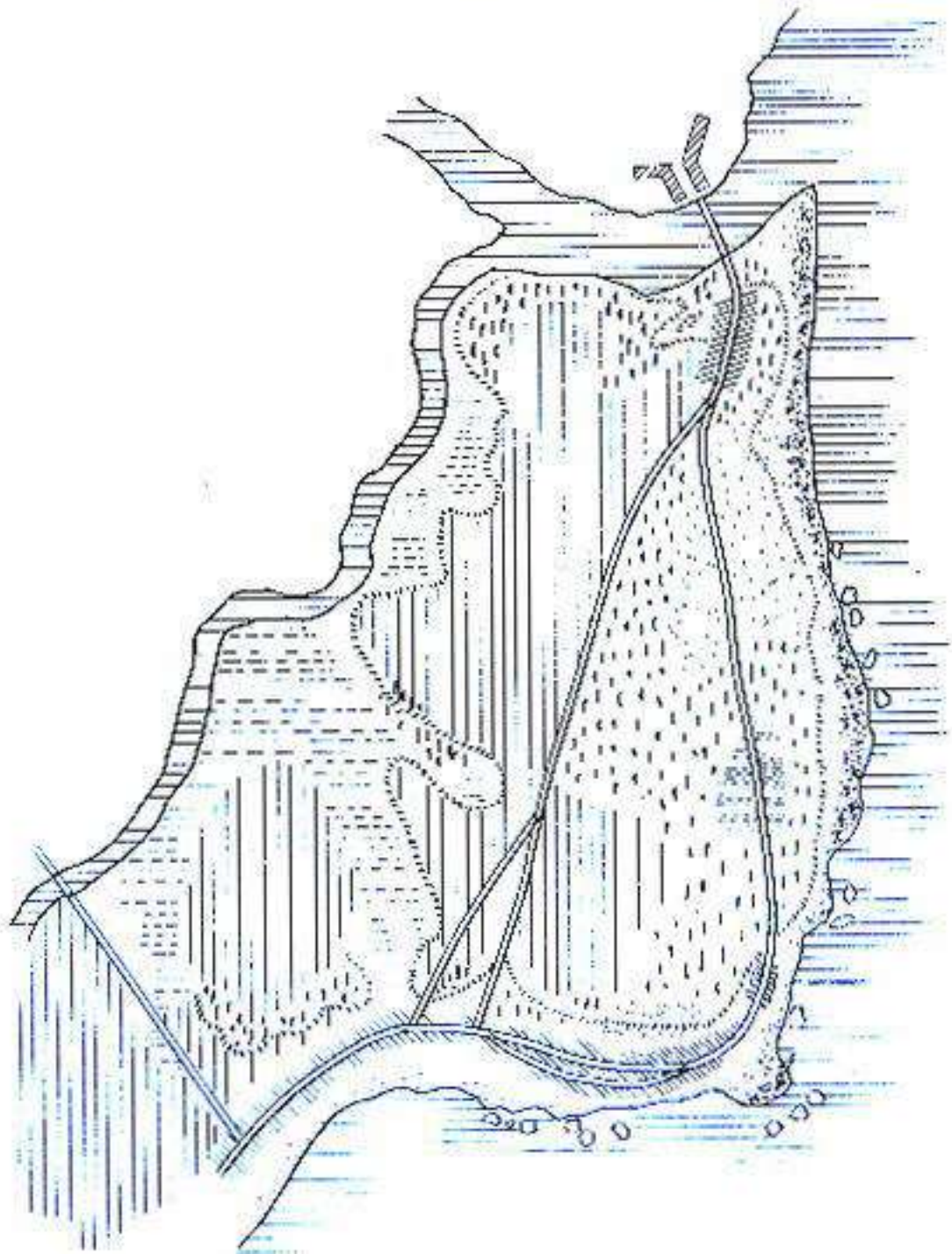
砂地



田



水田



(七) 動植物

杉

松

古来植栽ニ注意シタルト風土ノ適スルト加フルニ万里ノ

ニ若杉アルノミ

大洋ヲ吹き来ル潮風ノ作用トニ依リ其ノ大幹ヲ雄偉ナラシ

銀杏

メ其ノ枝振ヲ多趣味ナラシメ 浜ノ松トシテ或ハ早く歌謡

願入寺境内ニ一本 晩秋初冬ノ趣ヲ添フルモノアルノミ

ニ入り或ハ広ク人々ニ膾炙ス 今老松ノ重ナルモノヲ挙ゲ

桜

レバ 願入寺境内 ドンドン山 祝町小学校内 原山 大

海風一帯ニ強キガ故ニ 大洗神社前 祝町小学校庭等ニ独

洗山 女子小学校内 仲池近傍

一帯ニ強キガ故ニ 大洗神社前 祝町小学校庭等ニ独り春

皆何レモ雄松ナリ 而シテ 祝町御台場 原山 子ノ日ノ

ヲ領スル外ハ甚タ多カラズ

原一帯ハ樹齡二三十年内外ノモノ ヨク繁茂シ多クハ魚付

但シ 大洗山一帯 願入寺境内及祝町市街ニ植付ラレタ

林 防砂林タリ

ル 本ノ芳野桜ハ明治四十二年中祝町矯風会ノ栽植シタル

モノニシテ大ニ風致ヲ添ツツアリ

樟

願入寺門前ニ一株アリ 祝町小学校内ノ数株若木ナリシ

校庭ニアリ

古ク万葉ノ古歌ニ入りテ有名ナリ 大洗社前及磯浜小学

ガ何レモ枯レ果テタリ

椿 結香 桑 漆樹 苧麻 木綿

槐 ポプラ

磯浜男子及祝町小学校庭ニ数十株皆ヨク生育シツトアリ

少之レヲ見ルコトアリ

何レモ有用植物ナレトモ殆ニ栽培セラレズ 但 桑ノ多

有加里

極メテ有名ナル熱帯性植物ナリ 祝町小学校ニ於テ試植

有毒植物

最多キハ毒空木ニシテ大洗ヨリ子ノ日ノ原一帯到ル所ニ

シタルモ不幸ニシテ生育セズ

生ズ 檜しきみ 烏頭うざ 曼荼羅華まんだらげ キンポウゲ 狐ノホタン等磐

チャンチン

船山近傍涸沼川沿岸ニ多シ

棟科ニ属スル外来種ノ喬木ニシテ成長極メテ早シ 祝町

野生植物

小学校内ニ一株アリ

茫々タル子ノ日ノ原一帯 晩春初夏待宵草 淋シゲニ短

海桐

キ運命二人ノ哀愁ヲヒキ 秋ハ七草ノ盛美クシク 尾花ノ

嫋々トシテ秋風ニナヒクヲ見ル

海底地質

砂防草

多クハ砂レキニシテ 二尺乃至三尺ノ下ニハ大玉砂利

パスパラム マンケシ 本間郡長東職時代ニ試植シタル

十二尺以下ニ於テ粘土質岩床

モノ 祝町下海岸ニアリ

水深海岸線

零点以下約八九尺

第二章

波浪ノ方向及高

(一) 海

北風ニ起因スル波カ廻転シテ東南東ト南東ノ間ヲ襲来ス

潮汐干満潮位

ルモノト如シ 而シテソノ高ハ之ヲ故老ニ質スモ八尺ヲ超

那珂川筋字祝町量水標ノ零点ヲ最大干潮位トシ之レニヨ

ユルコトナシ

リテ潮位ヲ観測セルニ最大満潮ハ零点以上五尺トス

岩礁

潮流

桂町海岸ヨリ祝町ニ至ル海岸ニハ岩礁多シ 今之レヲ南

一秒時ノ速力 零寸八分乃至一尺零寸八分 方向不定

方ヨリ拳グレバ左ノ如シ

一 久下磯 今築港区域内

一一 大甕磯 神磯

二 燕磯

一二 横磯 稻磯 中磯

三 割塚磯 桂町二丁目ノ下

一三 平太郎磯

四 大磯 同所ニアリ 其ノ東ニ地獄石 北ニ放屁石

一四 鈴懸磯 棟梁磯 滑磯 砂磯

アリ 前方ニ箱石長磯大溜アリ

一五 強磯 赤磯 牛磯

五 籠口 俗ニドンブリコ 緑町一丁目下

六 大磯 同所ニアリ 北ニ平代磯 東ニ里石 沖ニ

第三章 氣界

輪ノ島背船 長磯 藻屑磯

(一) 氣候

七 鞍掛磯

風力及風向

八 竈磯 鳴門 錢磯 畠作 筑輪磯

一年ヲ通シテ春夏秋ハ北東風多ク 冬ハ北西風多シ

九 雄咲耶 大洗崎ノ良位ニシテ岸ヲ距ルコト四五町

風力ハ明治三十九年ヨリ同四十一年ニ至ル三ヶ年ニ於

一〇 雌咲耶 此ノ二礁ハ常ニ白浪立ち騒グ

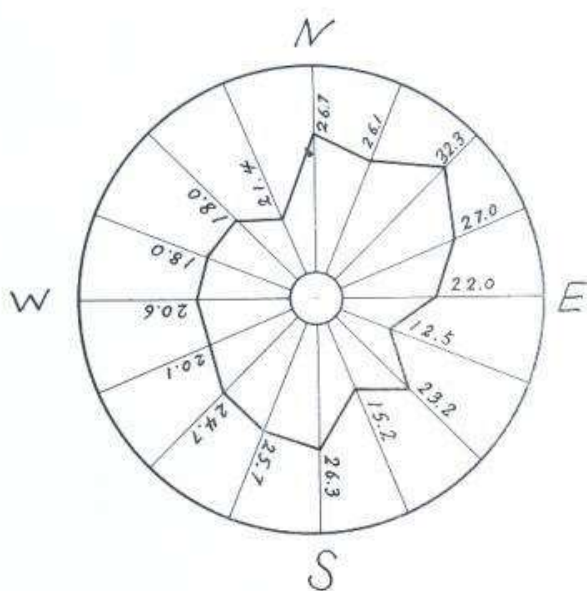
平均風速度ノ大ナルモノハ 北東風毎秒七米突六 北西風

四米突一ナリ 而シテ同期間ニオケル最強ノ風ハ 明治四十年三月二十三日ニ起リタル北東風ニシテ其速力一秒時ニ付三十二米三 即チ一時時七十二哩三トス

自明治三十九年

至明治四十一年 最大風速図

縮尺壹分ヲ以テ四米突トス



(二) 平均気温

本表以下四表ハ明治三十年ヨリ四十三年ニ至ル十四ケ年間水戸測候所ニオケル調査ニ依ル

二二・二	七月	二・三	一月
二三・九	八月	二・四	二月
二〇・五	九月	五・四	三月
一四・九	十月	一一・〇	四月
九・一	十一月	一五・五	五月
四・一	十二月	一八・九	六月

(三) 最高最低平均気温

一 四 ・ 五	一 九 ・ 一	三 二 ・ 三	二 六 ・ 五	七 月	0 下 七 ・ 九	0 下 二 ・ 五	一 五 ・ 七	八 ・ 七	一 月
一 六 ・ 二	二 〇 ・ 五	三 一 ・ 〇	二 八 ・ 六	八 月	0 下 七 ・ 五	0 下 二 ・ 六	一 五 ・ 五	八 ・ 七	二 月
一 〇 ・ 六	一 七 ・ 二	二 五 ・ 四	二 五 ・ 〇	九 月	0 下 五 ・ 一	〇 ・ 六	一 九 ・ 八	一 一 ・ 二	三 月
三 ・ 七	一 〇 ・ 六	二 二 ・ 〇	二 〇 ・ 四	十 月	0 下 〇 ・ 五	六 ・ 〇	二 三 ・ 七	一 六 ・ 六	四 月
0 下 一 ・ 九	三 ・ 九	一 七 ・ 五	一 五 ・ 八	十 一 月	四 ・ 一	一 〇 ・ 七	二 七 ・ 六	二 〇 ・ 八	五 月
0 下 六 ・ 三	〇 下 一 ・ 〇	一 七 ・ 五	一 〇 ・ 九	十 二 月	一 〇 ・ 一	一 五 ・ 三	二 九 ・ 四	二 三 ・ 四	六 月

最高 最低 極度 平均

(作成者註:「0下」は「零下」と思われる。)

一 七七	七月	一 四〇	一月
一 六四	八月	三八	二月
一 九八	九月	一 七五	三月
一 七四	十月	一 八四	四月
一 四〇	十一月	一 七五	五月
三七	十二月	一 八六	六月

五耗以上ノ降水日数(普通トモイフベキ程)

〇、一耗以上ノ降水アリシ日数

(五) 降水平均日数

一 〇	七月	二 四	一月
一 六	八月	二 三	二月
一 二	九月	一 八	三月
一 七	十月	一 五	四月
二 三	十一月	一 五	五月
二 七	十二月	一 〇	六月

(五) 晴天平均日数

第二編 人文界

第一章 戸口

(一) 人口(現住)

	四十四年	四十五年	大正二年	大正三年
全町				
男	六一八九	六二八九	六二九二	六一二三
女	六〇九二	六三三五	六二六二	六一四六
計	一二二八二	一二五二四	一二五五四	一二二六九

祝町	男	二九六	三〇四	三〇三
	女	三三九	三七二	三六二
	計	六三五	六七六	六六五

(二) 戸数

	四十四年	四十五年	大正二年	大正三年
全町	二二三〇	二二二七	二二五八	二三〇〇
祝町	一四二	一五五	一五〇	

(三) 職業別戸数

全町

	四十四年	四十五年	大正三年
農	三九〇	三九〇	三五五

漁	八六九	八六九	八九七
---	-----	-----	-----

工	一六二	一六二	一六六
---	-----	-----	-----

商	六二六	六二六	六九六
---	-----	-----	-----

交通業	八一	八一	七〇
-----	----	----	----

公ム及自由	七一	七一	一六二
-------	----	----	-----

其他	二一	一八	九
----	----	----	---

祝町 四十四年四月 四十五年四月 大正二年四月 大正三年四月

農 二六 二六

商	二六	二七
工	一三	一一
漁	八	九
官公吏	六	五
医師	一	一
勞	一〇	一四
貸座敷	五	五
引手茶室	二〇	一八
其他	二七	三九

(四) 祝町職業戸数細別

四十五年四月 朱書ハ副業ハ

農	二六	(三〇)
商	二七	
菓子	八	(四)
鮮魚	三	
呉服店	一	(一)
古物	一	
雜貨	三	
小マ物	一	(三)
質屋	一	
八百屋	一	(一)
薪炭	一	(四)
酒屋	二	(二)
鮎屋	三	
ソバ屋	一	(一)
飲食店	一	
工	一一	
大工	五	(三)
木挽	一	(一)
指物	一	(一)
漁	八	(二〇)
官公吏	五	(三)

醫師 一

勞 十四

車夫 一〇 日雇 四

貸座敷 五

引手茶屋 一八

其ノ他 三十九

僧侶 二 左官 一 理髮 一 (女二)

職工 二 無職 遊芸師 一 (二)

水車 一 汽船夫 一 使丁 二

箱屋 二 鍼治 一 芸妓 六

裁縫手マ 三 橋番 一 経具師 一

妓夫 一 看護婦 一

(五) 戸口ノ増減

年次	元禄十五年	文政年中	天保五年	弘化二年	明治三五年度
人口		三六一二 男一九六二 女一六五〇	三七二四 男一九四〇 女一七三四		男六七八〇 女四八二五
戸数	六〇〇	八四一	八六八	一一〇〇	二三〇八
	一〇七一・〇六三 石		一〇九三・三五四 九三・三〇八	一二〇〇・〇〇〇	

第二章 政治及自治

(一) 行政及自治 大正二年三月

茨城県知事 岡田 宇ノ助

東茨城郡長 関谷 直行

選出郡会議員 中根 環

高崎 音三郎

磯浜 町長 増子 貞

助役 小林 綏

収入役 谷中 博武

町会議員 石井藤介 溝口国松

関根文助 関根源吾

関根喜兵衛 蒨常四郎

関根栄助 小松崎子太郎

小山田兵四郎 勝扇巳之吉

粉川由兵衛 加藤忠重

古渡永太郎 片岡澤吉

会沢兼吉 高崎音三

山戸千之助 田口茂兵衛

小松崎捨五郎 川上常次

関根治平 鈴木常助

町書記 棚井涉 粉川長

小林徳太郎 高柳堯光

鈴木午次郎 鈴木富蔵

大森卯之助 富沢文太郎

荻沼秀之介 久保田耕

金 八万八千三百五拾壹円 大正元年度

上田徳次郎

金 七万円 大正二年度

町役場内事務処理分課左ノ如シ

金 八万九千円 大正三年度

庶務課

税務課

第三章 教育

會計課

(一) 学校沿革

戸籍及兵事

小学校設置ノ経過ノ大略ハ前記学校一覽ニ稍ニ詳述セリ

職員及選挙人

却ツテ説ク 本校タル大洗南小学校ハ明治十七年三月校舍

既定予算額 金拾六万九千五百円ヲ

焼失ノ厄ニアヒ一時祝町ノ郷倉ヲ仮教場トシテ通学セシメ

金参拾四万八千五百円ト

シガ 十八年五月校舍新築成リ十月二十五日開校ノ式ヲフ

更ニ改正シ 大正元年度以降ノ年度割金額ヲ左ノ通り更

明治二十年一月 本校ヲ磯浜尋常小学校ト改称シ分校ヲ

生 生ス

合併ス

二十六年二月 高等科ヲ併置シテ磯浜尋常高等小学校ト

磯浜尋常高等小学校

称ス

訓導兼校長

神谷 晋三

三十年八月二十日 高等科ヲ分立チシテ尋常及高等ノ二

訓導

田山丑五郎

梅原彦壽

校トス

馬場高壽

高崎とめ

明治四十二年六月二十八日 両校ヲ合併シテ更ニ男子ト

會澤銀之助

杉浦 熙

女子トノ二校ニ分チ 男子校ヲ磯浜尋常高等小学校 女

准訓導

大井武雄

大高亮太郎

子校ヲ磯浜女子尋常高等小学校ト称ス

住谷きみ

吉田こう

大正元年九月 新ニ地ヲ相シテ 女子校舎ヲ新築 旧来

蔀 藤吉

ノ校舎全部ヲ男子校舎トス

磯浜女子尋常高等小学校

(二) 教育費

訓導兼校長

小神野 三男四

「学校一覽」ニ出テタリ

訓導

小松崎保造

五島三郎

(三) 職員

鶴見清四郎

伊藤萬吉

桜井はる 前田きく

タルモノニシテ尋常ノ石ニアラズトテ塩焼翁等異ミ居タリ

准訓導 小室定次郎 小貫重郎助

其明日二十余ノ小石其ノ左右ニ列リ陪侍スルモノニ似タ

武田なへ 石井とめ

リ 彩色常ニアラズ 或ハ沙門ニ象リ只耳目ナキノミナリ

菅沼とき

己ニシテ神アリ 人ニ憑テ曰ク 我ハ大奈母知少比古奈

第四章 神社仏閣

(一) 大洗磯前神社

命ナリ 昔 此国ヲ造リ終テ東海ニ住マシ今民ヲ濟ハンガ
為ニ歸ルト 因テ之ヲ官ニ奏ス

祭神 大貴巳命 少彦名命

天安元年八月辛未 社ニ預ラシメ 十月巳卯薬師菩薩明

社格 国幣中社

神ノ号ヲ授ケ玉ヘリ

創建 文徳元年

醍醐天皇延喜ノ制ニ明神大社ニ列ル

縁起 齊衡三年戊戌大洗磯前ニ天降り座セル神アリ

古老ノ傳ニ曰ク 古ヘハ本社其基趾広クシテ 所撰々小

初本郡ノ民 塩ヲ煮ルニ 夜半海上ヲ望ム 光輝天ニ映ズ

社凡四十余所 神戸千石ニ下ラズ 祭祀ノ禮モ豊厚ナリシ

明日ニツノ怪石水次ニアリ 各高一尺ハカリ 是神ノ作り

ガ 永禄年中小田氏知ノ乱ニ兵燹ニ罹リ祠宇蕩然タリ 神

戸甚夕衰シ 小祠ヲ海浜ニ設ケテ僅ニ歳時ノ祭ヲ執行シタ

早旦 神官 神殿ニ裝飾ス

リ

午前八時 神官ノ長官以下幄舎ニツリ

東山天皇元禄三年七月巳酉 源義公新ニ地ヲ相シ社ヲ建

地方ノ長官以下幄舎 手水ノ儀アリ

テ遷宮式ヲ行フ

次属御幣物ヲ門内ニ入レ砌上ニ置ク

中御門天皇 正徳五年八月 源肅公本社ノ縁起ニ卷ヲ作

神官ノ長官官殿ニ昇リ御扉ヲ開キ側ニ候ス

ツテ之ヲ納ム

此間奏樂

享保十五年乙丑八月今ノ地ニ鎮座ス 即チ永禄以前ノ旧

次 同次官以下神饌ヲ伝供ス 此間奏樂余御幣物ヲ辛櫃

趾ナリ 社領ハモト六石八斗七升ニ合ナリシカ 仁幸天皇

ヨリ出シ殿ニ昇リ仮ニ案上ニ置ク

天保中源烈公ヨリ十三石六斗三升九合ヲ寄セララル

次 神官ノ長官御幣物ヲ神前ノ案上ニ奉ル

明治十八年四月 国幣中社ニセララル

次 同官祝詞ヲ奏ス

儀式 二月祈年祭 九月九日例祭 十一月二十三日新

次 地方ノ長官玉串ヲ献リ拝礼畢テ（おわりて）下殿

嘗祭ニハ奉幣使下向ス 此ノ際ノ祭式左ノ如シ

次 同官員拝礼

次 神官長官玉串ヲ献リ拝礼畢テ本位ニ復ス

次 同次官以下拝礼

次 同官以下御幣物及神饌ヲ徹ス 此間奏樂

次 同長官御扉ヲ閉ズ 下殿幄舎ニ位ス

此間奏樂

次 各退出

靈尊ノ第三子ナリ スナハチ神籬ひもろぎヲ山城ノ西洞院五条松原

ニ建テ 五条天神トアカメマツレリ 皇朝医家ノ祖神トス

紀伊国淡島明神モマタ少彦名命ナリ 此ノ二神心ヲ勦ヤ心

ヲヒトツニシテ天下ヲ經營つくりリタマヒ蒼生及畜産ノ為ニ病ヲ

イヤシ禁庄ノ方法ヲ定メ玉フ 是以テ萬世ニ至ルマデ 皆

恩顧ヲ蒙ラサルモノナシ(コノ間數百字略ス)

水戸城ノ東ナル大洗磯前ノ地ハ大貴巳命少彦名命降臨ノ

地ナリ鎮座歳久シク 靈驗マスマス新タナリ ソノカミ兵

火ニ罹リテ古文書ノ存スルモノナシ 今本縁一卷ヲ撰マシ

メテ是ヲ本社ニ納ム 仰願ハ黎民恵ノ露ニ潤ヒ邦家寿福ノ

慶ヲ重ネンコトヲ 韓子カ言葉ニ祀ノヨルトコロコレ人ナ

リ人ノ仕フル所ハコレ神ナリトイヘリ 神ソレコレヲ鑑給

源綱條卿ノ奉献セル本縁ハ左ノ如シ

常陸国鹿島郡宮田邑(今磯浜ト称ス)大洗、磯前ニシヅマ

リマス大明神ハ 大貴巳命少彦名命ニ神ナリ 神代ヲ稽ル

ニ 天照大神ノ皇弟素戔雄尊ユクユク出雲国ニ至リ給ヒ

稲田姫ヲ妃トナシ大貴巳命ヲ生マセリ 少彦名命ハ高皇産

へカシ

正徳五年乙未八月吉日

権中納言従三位鳳山源綱條

水戸府臣安積覺謹跋 別ニアリ 今之ヲ略ス

本社ノ靈験ヲ傳フルコト左ノ如シ

毎年十一月ヨリ正月ニ至ルマデ嚴冬ノ候海上氣起リテ物

ノ色モ弁セス 名ツケテ海煙トイフ 然ルニ神殿ノ前ヨリ

鹿島ノ浦サシテ巾三十間ハカリ海煙ナク漁舟モ明カニ見ユ

相傳フ 是レ両社ノ神靈来往ノ道ナリト

本町ハ漁業盛ルモ海上厄ニアフモノス少ナシ亦盲人ナシ

禍ニアエルハ皆他ヨリ来リシモノナリ

元禄十八年七月七日 銚子沖合ニ風波起リ溺死七百五十

六人ニ及フ 中ニ本町ノ漁夫モ六十三人アリシカ一人モ死

セシモノナシ 此輩画工ニ托シテ玉取り龍ヲ画カシメ神殿

ニ掲ケ賽ス 中ニ一人アリ頑トシテ其義ぎぎよ醜ニ応セス 忽ニ

シテ眼口歪科シ両脚萎エテ五日ニシテ死ス

同九年七月二十六日 岩城小名四倉ニ暴風起リ溺死スル

モノ三千余人 時ニ本町ノ漁人十五人其ノ中ニ至リタルモ

破レタル舟板ニ取リツキテ漂流スルコト一昼夜 廻船ニ救

ハレテ皆死ヲ免ルコトヲ得タリ

寛永元年七月 本町ノ漁夫藤左エ門等十四人 一船ニ乗

リ鰹魚ヲ釣り居リシニ 暴風ノ為船覆ヘリ 十二人ハ無事

ナリシガ ウチ二人ノミ死セリ 其ノ二人ハ逢瀬川尻ノ人
ナリ

本社ノ祠官ハ累世大塚氏ナリシカ 明治六年ヤメ現今ハ

官司塙豊樹氏禰宜田口勲氏以下職員数多アリ 塙祠官大正

三年三月退職

小松崎吉郎 宮司仰付ラル

末社

八幡宮 モト祝町ニアリタリ 祝町ニ天妃神ヲ創建

スルニ際シ本社境内ニ移サル

清良社 小幡出雲守良清ヲ祀ル

與利幾神社 建御名方命ヲ祀ル

安永六年十一月 清水平太夫ノ漁船 海上ヨリ漂流セ

ル異木ヲヒキ来ル 神アリ人憑テ曰ク 之レ諏訪明神ノ靈
木ナリト 因リテ之レヲ祀ル

(二) 天妃神

祭神 橘媛

創建 元禄三年四月六日

祭日 陰曆三年(月?)二十三日

唐ノ福建興化林氏ノ女大海ニ没シテ神トナル 天之レヲ

天妃トイフ 神靈ヨク海ヲ渡ル 船舶ヲ守護ス 心越禪師

水戸ニ客タルトキ祇園寺ヲ創シ境内ニ天妃権現ヲ祀ル 義

公 是レヲ本町ニ創建シテ海上ノ守護神タラシム 湊町ノ

祀官鈴木長門 大洗ノ祀官大塚伊予交々命ヲ受ケテ隔年ニ

ソノ祭事ヲ行ヒシカ 明治二年ヨリ専ラ大洗ニテ行フニ至

レリ 而シテモトハ天妃神社ノ木像ヲ奉祀シタリシカ 源

烈公ニ至リ 前ノ木像ヲ引上ゲ改メテ御鏡ヲ御靈代トシテ

橘媛ヲ奉祀スルニ至レリ 漁業家ノ尊崇今ニ至ツテ極メテ

厚ク祭典ノ日ニハ三浜海上一般船止メトシテ参詣ス

願入寺縁起

抑 常陸国東茨城郡磯浜町祝町願入寺は本願寺第二世如

信上人の創建にかかる名刹である。如信上人は親鸞聖人の御

長子善鸞上人の御子にして 親鸞聖人の正しく御孫にあた

らせらる。而して親鸞聖人面授口決の法弟である。顧みるに

祖師親鸞聖人は御在世のうち二十有余年を関東化導のため

費やさされ 六十の齢を越へて華洛に帰へり給ひ 晩年三十

年間を静に京都にて過ごされた。而して遂に弘長二年十一月

二十八日を以て往生の素懷を遂げ給ふた。

(三) 沖ノ洲稻荷

祝町字西町ニアリ 往昔野水半次トイフモノ紀伊ヨリ来

リテマカセ網ノ漁法ヲ傳フ 稻荷ハスナハチ半次ノ信仰シ

タル社ナリ 時ノ藩候田地三十石ヲ授ケ字青塚ニ住セシム

其後 那珂川次第ニ南方ニ移リ コノ青塚モ欠損シツクセ

次に残されて居るは聖人の法灯の問題である 御子善鸞

上人は本願寺を継ぎ給はず 御孫如信上人が入って本願寺の第二世となり祖廟の留守職の御跡を継ぎ給ふ事になった。案ずるに如信上人は常に深く思ひを奥常二州の教化に罩こまれ 間もなく留守職をやめられ 本願寺を聖人の御末彌女の系統なる覚如上人に御譲りになり 祖師の東国御教化の大偉業を継承せんため 白雲悠々と空を流るゝ如く東国に下り 更に奥州に入り居を白川郡大網村東山に定め 一宇のさゝやかなる草庵を結びひたすら祖師の草庵生活を偲びつつ 自らの信仰を深め奥州東国の御同胞に教を布かれた。

その高潔なる御心情真に仰ぐべきである。草庵創立の時は弘安二年にして如信上人四十二歳にして世は北条時宗が兵

を筑紫に遣はし元寇に備へしの歳なり、後世此の御草庵を常陸の御草庵に対して奥の御坊と呼ぶに至った。かくの如く上人は御あとを覚如上人に譲り奥常二州に教化全力をそゝぎ給ふた。然りと雖も造次ぞうじてんばい顛沛にも祖廟を忘れたまはず 常に憶念しつゝその報恩のあまり風雪を冒し烈日を厭はず奥常二州に教を布き給ふたのである。其の頃常に持し給ふたのは彼の一個の鉄鉢である(常陸僧史略に出ず)その鉄鉢は現在願入寺の寺宝として遺されて居る。

如信上人東国御下向の当時教を蒙った人々は祖師聖人の御再来と喜び仰ぎ奉った事であろう。そのため奥常二州の大地に法雨はいやが上にも潤ふた事であろう。如信上人の奥地にて鉄鉢に御受けになった米の幾分は毎年祖廟の御正忌に

御仏供米として上人自ら米囊に納められ 十数ヶ国の境を越えて京洛へ持たされたのであろう。かくて京都本願寺七昼夜の報恩講には御仏供米として捧げられ所謂行田米の濫觴

とはいった。かく奥州より年々京都祖廟の報恩講勤修に上洛し給ふ事実には二十年の永きに及んだ。如何に祖師の御恩に感激し報恩の行をぬきんでられたが此の事実で明である。

如信上人にとり報恩講ほど思ひ出で深く尊きものはなかった。然るに上人にとり最後の本廟の報恩講は来た。それは

正安元年の御正忌である。上人は此の歳も上洛になり手厚く七昼夜の報恩講を厳修し給ひ 御名残り惜しく祖廟に暇をつげ東国に御下向になった。而して常陸に入り給ふの御病に嬰らせられ 同国久慈郡金沢村なる高弟乗善坊の許

にて病愈々重らせられ 終に翌正安二年正月四日此高弟の宅に於て御往生を遂げさせられた。現今の依上村金沢の法龍寺はこの乗善坊の墓所のあるところである。

上人御滅後御子大納言浄如 奥の御坊を相承し 次で第三世空如に及び初めて寺宇を願入寺と改め勅願所と定められた。此の時京都本願寺第三代覚如上人御下向あり廿四輩を定め給ふた。当時の二十四輩は今現に願入寺に宝物として存す。

越えて第八如慶の時国乱を避けて常陸国那珂郡大根田村に移り 次で第十世如了の時同郡菅谷村に転じ 第十三世如正の時又更に同国太田在久米村に寺基を止むるに至った。而して第十五世如高の時同国水戸城主中納言徳川光圀卿

故々願入寺に詣で、其の由来を御聞きになり 如信上人の
高德を慕ひ其の教化の跡を偲び感激の余り寺領三百石を寄
附になった 其の光圀卿の御朱印文は左の如くで 願入寺
の変遷を頗る簡明に表白して居る。

『奥州白川郡大網村願入寺は如信上人の草創なり 正安元

年如信洛より還る途偶病に嬰る 暫く常州久慈郡金沢邑に
留まって癒す 明年正月四日寂す遂に金沢に葬る 爾来子

孫奕大綱に居す

文安中八世の孫如慶国乱を避けて常州那珂郡大根田に遷

居す 第十世如了に至って同郡菅谷村に移す 十三世如正

寺院を久慈郡久米村に営む 嗚呼 如信は実に親鸞の嫡孫

にして一宗の正統なり 然りと雖も奥常二州は本邦の東偏

にして大網久米一州の僻地なり 故に來り詣する者常に寡

なし 施囀者も亦少なし 今如高に至って都て十五世 寺

院歳に荒れ堂宇月に壞れ 余其の嫡流の衰微を傷むで攸を

茨城郡宮田村岩船に相し新に寺宇を造り 田園三百石を施

与し 内百石を分ちて永く如信墓所の守戸に充つ

延宝乙卯夏五月 日

源光圀拜

如高大上人

獅子座下

』

かくして第十六世如晴の代に及び水戸光圀卿現今の地に

壮麗な堂塔を建立し更に如信上人の靈像彫刻し願入寺に寄せらるゝに至った。東本願寺法主眞如上人は又喜びのあまり裏書きをなし給ふた。尚往時の光圀卿の書翰等は当寺の古文書中に現存す。

上述の如く願入寺世代は幾度か傳灯瀉瓶され第二十三世如證の代に至り 元治甲子の兵燹に罹り堂塔伽藍悉く烏有に歸し 今僅に仮堂を営み本尊を安置し法宝物を護持しやがての復興をまつものである。

(四) 願入寺

浄土真宗 東本願寺派ニ属ス

東本願寺開祖親鸞上人 或時 其孫如信上人に告ゲテ曰

宣ヨリ年々玄米三十俵ヲウク

根田ニ移ル

第十二世如正ニ至リ 菅谷村ヨリ久米村ニ移リ 佐竹義

ク 東国ハ僻遠ニシテ教化未タ普カラス 我没後宜シク下
向シテ教ヲ布ク可シト 上人此ノ旨ヲ体シ 本山ヲ覺如上
人ニ譲リ 自ラ東奥ニ下リ先奥州白河郡大綱山ニ庵ヲ結ブ
時ニ弘安二年 コレヲ奥ノ御坊トイフ
正安二年正月 上人 上洛シテ下山ノ際途中久慈郡金沢
村ニ遷化ス
第三世 空如ノ時 初メテ大綱願入寺ト称シ 後小松天
皇ノ勅願所トナル
第八世 如慶奥羽ノ乱ヲ避ケテ 常陸郡(国?)那珂郡大

第十五世如高ノ時 源義公其ノ由緒ヲキキ 其ノ一女(鶴 脇立 聖徳太子ノ尊影

子)ヲ城中ニ養ヒ 之レニ本願寺第十四世琢如上人の次子瑛 見直太子真影

兼ヲ迎ヒ配シテ第十六世トス 七高僧相影

延宝元年春 義公 此ノ地ヲ拓キテ磐船山ト称シ 堂宇 如信上人眞像 源義公ノ作

ヲ建テ鐘樓鼓樓ヲ設ケ 寺侍ヲ附シ門前ニ遊郭ヲタテ 妓 如信上人似影

樓及渡船場ノ物成ヲ寺領ニ附シ 外ニ三百石ヲ與ヘ 瑛兼

ヲ如晴ト改メシメ 本山ノ連枝ト定ム (五) 西福寺

水戸国乱ニ際シ 堂宇悉兵火ニ罹リ 宏大ナリシ当寺モ 俊明山無量寿院ト号ス 天台宗山門派ニ属ス

鳥有ニ歸シ 明治元年旧地久米村ニ移リシガ 同七年歸住 寛弘年間比叡山恵心僧都ノ開基ナリト伝フ 一説ニハマ

ス 十七年仮本堂ヲ建築ス 夕栄信和尚ナリト 何レカサタカナラス

モト 本郡稻荷村(大場村)島田ニ在リシカ 元禄十二年

本尊 阿弥陀仏 立像二尺二寸 春日ノ作ト伝フ 義公ノ命ニ依リ現在ノ地ニ移ル 時ニ本寺第二十五世住職

舜海和尚ノ代ニシテ 水戸封内天台宗寺院ノ取締方ヲ勤務

無格社 二四

シ 朱印地若干アリ

神職 宮司一 禰官(宜?)二 僧侶四 外也二

元治甲子 水戸国難ニ祭シ兵燹ニ罹リシカ 明治二十四

年八月第四十六世融信和尚本堂ヲ建築ス

第五章 教化

同十四年本山直末ニ属シ 七等ノ大寺ニ編入セラル

(一) 大洗矯風会

開基以来約九百余年

明治四十二年一月四日 神社局長井上友一氏等大洗神社

ノ際風俗改良ニ関スル談話アリタルニ基キ湊警察分署長小

本尊 阿弥陀如来坐像

泉幾次郎 町助役本多千太郎 宮司埴豊樹諸氏相謀リ勧誘

但シ木製長五尺三寸 源信僧都ノ作

盡力ノ結果 同年三月二十二日大洗神社社務所ニ於テ埴宮

外ニ智証大師ノ筆 不動明王縦三尺横一尺六寸極彩色

司座長トナリ規約及役員選挙ノ件ヲ決定セリ

ナリ 旧水戸藩侯ノ所蔵ナリ 明治三年四月徳川昭武ヨリ

本会ノ目的ハ当町ニ於ケル風俗ノ矯正及勤儉貯蓄ノ風ヲ

末寺ニ養福院アリ

奨励スルニアリ

現在會員 二百五十二名

六八角ニテ高六尺

貯金人員 (記載なし)

永町若見屋角

祝町海門橋畔

貯金金額 (記載なし)

郵便局角

大貫町トノ境

仲町小山田氏ノ角

大洗鳥居前

(二) 磯浜青年団

明治四十二年八月 後藤豊三郎 川島貞之助 関根西之

(三) 磯浜図書館

助 大森久七 関根正 諸氏ノ発企ニヨル

青年団員ノ発企ニテ四十一年五月西福寺内ニ開設 會員

茶話会ヲ開キテ智識ノ交換ト親睦トヲ謀ル 築港問題起

一人ニツキ金一円ヲ出資シ各自希望ノ書冊ヲ購入シ 又

ルニ及ビ磯浜振興策ヲ講ズルコト スクナカラズ

コノ外有志ノ士ヨリ寄贈又ハ借入ヲナス

四十三年五月十二日ヨリ三日間 青森市大火義捐ノ為慈

所蔵冊数 百四十冊

善演芸会ヲ開キ純収入二十五円四十銭ヲ寄贈ス

四十三年十一月 左ノ場所ニ指導標ヲ岩舩石ニテ建ツ

(四) 青年親交会

十四歳ヨリ二十五歳未滿ヲ会員トシ 交誼ヲ厚ウシ智識

八錢一厘ヲ海陸両軍人ニ分配シテ解散ス

ヲ交換スルヲ以テ目的トス

其後 在郷軍人會ノ制定セラルトヤ 大正元年八月?

現在会員 三十六名

日觀閲点呼後 分会ノ成立ヲ告グ

(五) 労働矯風会

会長 陸軍二等軍医従七位勳六等功四級 辻虎蔵

明治四十二年中 労働者ノ矯風ヲ目的トシテ柴内豊松氏

副会長 陸軍一等縦工長 勳七等 川上卯

ノ発企セル団体なり

之助

(六) 帝国在郷軍人會磯浜分会

下士 兵 残 計

明治四十一年三月 軍友会ヲ組織ス 当時ノ役員左ノ如

陸軍 一〇 一二六 四一四 五五〇

シ

海 〇 一七 〇 一七

会長 従七位勳五等 高崎音三郎

金鷄 〇 二 〇 二

副会長 勳七等 川上卯之助

四十三年十一月二十五日 總會ヲ開キ 基金十九円四十

(七) 明治三十七・八年戦役戦死者

兵種官等	氏名	戦死年月日	戦死場所	墓地
歩兵上等兵	山崎 政寿	三七・一〇・一一	清国本溪湖	川根村飯沼
歩兵一等卒	飛田徳太郎	三七・一二・三一	同 水師營	向西庵
工兵一等卒	梅川大次郎	三七・一一・一一	同 大王庄	現当庵
歩兵一等卒	伊藤 春吉	三七・一〇・二九	同 松樹山	願入寺
歩兵少尉	深作恒三朗	三七・九・二二	同 東太南平高溝地	即心庵

同戦役病死者

兵種官等級	氏名	病死年月日	病死場所	墓地
歩兵上等兵	小坪善左エ門	三七・九・一三	広島予備病院	願入寺
輜重輸卒	石田 留吉	三七・九・一四	鳳凰城兵站病院	円心庵

徴兵検査人員 (註：記載なし)

〃体格別 (註：記載なし)

(八) 壮丁

明治四十三年度以降壮丁教育類別次ノ如シ

大正三年	大正二年六月	四十四年八月	四十五年四月	四十三年八月	
	一六	一二	一三	二八	不就学
	三三 二六	二三 八〇	三四 〇三	三二 一八	同尋常 半途卒業
	一一 九一	二一 二三	一 三九	一一 五一	同高等 半途卒業
	二	一	六	三	中等教育
		三 三五	三 二七	六 六〇	花ト 柳ラ 病ホ ム
	一一 六				受験人員

(九) 慈恵

愛国婦人会員	日本赤十字社	正終身 六三九三	会員数
		八	救護保護 五員

大正二年四月現在

其ノ他ノ団体

(十) 祝町矯風会

沿革 明治四十二年二月大洗矯風会組織ノコトアルヤ

当祝町 中根環 片岡澤吉 渡邊精作 清水船彦 大内重

遠ノ諸有志ハ支部組織ノ議ヲ本部ニ交渉シテ遂ニ同三月七

日 祝町小学校内ニ第一回總會ヲ開キ 役員ヲ選挙シ会則

ヲ議定ス

会長 中根環 副会長 大内重遠

幹事 小坪善四郎 大田専藏 岩田勝之介

寺門吉太郎 梶尾兼吉

評議員 中岡澤吉 北兵四郎 清水船彦

白戸源雄 渡邊精作 河上梅吉

山戸半次

同月 独立シテ祝町矯風会ト称ス

事業ノ大略

一 明治四十三年二月十一日 祝町小学校ニ於テ 孝子

- 生形ふく 忠僕村上定兵衛 表彰式ヲ挙グ 八 同 四月十六日 第二回総会ヲ開ク
- 二 同 三月十三日 付属祝町文庫ヲ開設シ小 九 四十五年一月一日 新年祝賀会ヲ開ク
- 学校ニ於テ開庫式ヲ行フ 十 同 四月十四日 第三回総会ヲ開ク
- 三 同 三月十四日 三浜漁船遭難ニツキ慰問 十一 同 七月二十二日陛下御不例 回春ノ祈願
ヲ大洗神社ニ為ス 役員以下会員全部出席
- トシテ幹事出張
- 四 同 三月 右救済義援金ヲ募集シ 本日以後役員交互ニ日参ヲ為ス
- 金三十二円六十銭ヲいばらき新聞社ニ託シ 十二 同 七月二十九日更ラニ会員及一般町民惣
テ義捐ス 出ニテ祈念ヲナス
- 五 同 四月十七日 第一回総会ヲ開ク 十三 御大葬ニツキ 天機奉伺 御機嫌奉伺ヲ 大正
- 六 同 八月十三日 水害救済金品ヲ募集ス 元年八月三日捧呈ス
- 七 四十四年一月一日 回札廃止 新年祝賀会ヲ (十二) 祝町文庫
- 開ク 本文庫ハ祝町矯風会ノ付属タリ 文庫ノ維持発展ハ 有

志ノ援助及設立首唱者 賛助員ノ納金ニ依ル 祝町小学校
流シ山車手踊等ノ余興ヲ催シ市中頗ル雑踏ス 四十三年其
職員人見祐之介 矯風会及文庫ノ理事ヲ兼ネテ当文庫ニ居
ノ冗費多キヲ憂ヒ町内世話人相議シ爾今 各町年番二三ヶ
住ス 町タケ余興ヲ催スコトニ改ム

貯蔵ノ凶書 (記載無し)

第六章 祭礼

(一) 鎮守祭

九月九日 奉幣使参向 幣帛ヲ献ズ 神官一同奉仕 町
神官茲ニ至レハ祠官携フル所ノ短刀ヲ以テ神繩ヲ切ル 此
長以下吏員 氏子惣代及小学校ノ拝礼アリ サレド一般町
ノ時 路上ノ群衆鯨波げいはヲアゲテ盛ニ塩ヲフリカクル 馬上
民ノ参拝スルモノ甚タ少シ
ノ神官一行ハ疾駆シテ一文字ニ大洗神社ニ入ル

(二) 八朔

之レ旧慣ニ依レリ鎮守祭ナリ 陰曆八月朔日 各町吹き
ラントス 蓋シ コレヲ得タルモノハ漁獲多シノ吉例ニ基
祠官一行ノ去ルヤ群衆相犇ひしめメキテ 青竹ノ一片ヲ攫取つかみ
ノ神官一行ハ疾駆シテ一文字ニ大洗神社ニ入ル

ク

往昔 鹿島郡ニ属シ 宮田郷ト称ス

(三) 神幸祭

尊卑分脉ニ参議藤田巨勢磨ノ子右左衛弓圭ノ嫡

舊九月二十五日 有賀神社神幸ノ儀アリ コレニ供奉ス

子 宮田ノ傳ニ從五位下内蔵助 母ハ常陸国鹿

ル兒童ハ壮健ニ育ツトテ 小兒ヲ連レテ参詣スルモノ絡繹らくえき

島郡人

タリ

弘安太田文書 北条宮田條五十六丁九段

陰曆廃止ノ結果毎年十月二十五日ヲ神幸ノ日ト改定ス

倭名鈔ニヨリテ地図ヲ按スルニコノ郷 東ハ太平洋 西

此日 大洗鳥居内ニ相撲ノ寄進アリ 小鳥 柿 蜜柑ナト

ハ蒜間江ノ下流ニ限り 南ハ大屋郷ニ接シ 北ハ那珂川ニ

ヲ売ル露店多ク出ツ

到リ 今ノ磯浜 大貫 二千九百余名皆古ノ宮田郷ナリ

文禄検地ノ後 茨城郡ニ属シ元禄以後本郡ニ復ス

延宝七年春磯浜ト改ム

第七章 沿革

佐竹義宣水戸ニ城主タリシ頃 名主トナリシハ土佐若狭

(一) 沿革

トイフ人ニシテ是レ即チ関根氏ナリ

武田ノ時ニ源兵エトイフ者名主トナル 此ヲ服部氏ト称

明治三十二年 山崎瀨氏町長トナリ 明治三十五年四月

ス 次ニ藏之介トイフモノ名主トナル 此ヲ加藤氏ト為ス

一日 加藤傳右衛門氏就職 三十九年三月三十一日満期退

寛永十八年水戸封内檢地アリ 此ノ時 庄屋ヲ茂作トス

職 明治三十九年四月一八日 大内直氏就職 四十二年三

次ニ関根助次郎ナルモノ莊屋トナル 天保改正ノ頃ノ莊屋

月一日辭職

ハ空之允トイフモノナリ

明治四十三年八月二日 増子貞氏就職

此ノ時 一戸ノ農ヲ二石五斗ト定メ 全町ノ農家ヲ四百

今 自治体ニ於ケル主要吏員更迭ノ大略ヲ表記スレバ左

八十戸トシ 平均一戸ニ一兩ツヽ合計四百八十兩ヲ徴収シ

ノ如シ

内二百五十兩ヲ官ニ納メ残金ヲ全町ノ費用ニ充テシム

町長

助役

収入役

爾来 関根氏 古渡氏 交々莊屋ヲ勤ム 次ニ川上友右

浅井光政

菊池庄衛門

山戸彦四郎

エ門氏勤メラレタルコトアリ

菊池庄衛門

福田 庸信

同人

明治六年古渡理平氏戸長トナリ 後川上友次郎氏 浅井

山崎 瀨

加藤傳衛門

小山 政成

光政氏次テ之レニ代ル

川島 徳重

加藤傳衛門

芳賀 飛龍

溝口 国松

社皆災ニ罹ル

大内 直

本多千太郎

谷中 博武

元禄元年 源義公沖ノ州ヲ願入寺ニ寄進祝町ト改ム 今

増子 貞

本多千太郎

同人

年恵明院如晴上人 京都ヨリ下ル

小林 綏

二年 大洗明神ヲ磯辺ヨリ 山ノ半腹ニ引キ 義立ノ沖

ノ州鎮守宇佐八幡ヲ社中ニ移ス

(二) 沿革 二

三年四月六日 祝町へ天妃神建立

天文元壬辰八月朔 茨城郡小幡城主中務良清大洗ニ詣テ

八年 祝町茶屋始メテ立ツ 酌取女ト号シ売婦ヲ抱シ妓

海岸逍遙ス 江戸但馬守道房之ヲ窺ヒ三百余騎ニ將トシテ

楼五軒御済シ 隠居ノ廓ト称ス後二軒立増ス 享保十二年

来リ襲フ 良清奮闘シテ死ス 其後 鳥羽田大学 増田藤

一旦廃セラレシモ延享四年九月再立 其ノ折水戸家中ノ達

九郎 立花甚六等亦之レニ死ス 後ニ土民之レヲ大洗社境

ニ

内ニ祠ヲ立テト祀ル 良清社即之ナリ

『此度湊於祝町洗濯屋相互候ニツキ 諸士中ハ無論雖輕

永禄年中小田氏知(天菴)乱ヲ為シテ大洗ニ火ヲ放ツ 神

御扶持人 水戸悪場ノ通り罷越候義御禁制 被仰出候』

元治元年甲子水戸正奸二党相争フヤ全町概ネ兵燹へいせんニ罹

此年十月十三日 松平大炊頭頼徳 市川三左衛門等ノ鋭

リ 願入寺 遊郭ノ規模今尚旧ニ復スル能ハズ

鋒ヲ避ケ 平戸村ヨリ本町ニ来リ海防陣屋入り 奸党ノ屯

町ニ退リ 幕兵即チ攻メ大洗山ニ據ル 天狗党委(?)湊ニ

セル磐船山ヲ攻ム 守将川上捨次郎戦ツテ之レニ死ス 此

退ク 幕兵及鎮党藤田健次郎 戸田藤三郎等 茲ニ陣シテ

際兵火市中ニ起リ願入寺亦焼失ス

以テ湊ヲ攻撃ス

十六日 天狗党曉ヲ犯シテ湊ヲ攻ム 波山勢ヨク戦ヒ

奸物遂ニ○賓閣いひんかくヲ焼イテ逃ル 大炊頭乃湊ニ移ル

第八章 人物

潮来館ノ巨魁 林五郎三郎 大貫ニ屯在セル佐倉藩勢ヲ

(一) 人物 一

撃チ之レニ死ス 仍テ其ノ兵祝町ニ退ク

一 元和五年備前ノ人 栗野甚三郎 本町ニ大網おおあぐり操ノ使

二十一日 井田平三郎 朝倉源太郎及五郎三郎ハ僕金

用法ヲ傳フ 子孫相継キ家を元網トイフ 今ノ川上

五郎等百余人高崎藩勢ヲ撃チ之レヲ破ル 既ニ幕兵市川勢

氏即之也

ヲ合セ 本町ヲ攻メ火箭ヲ以テ民家ヲ焼ク 天狗党仍テ祝

二 其後 漁業追ニ進歩シ 寛永二年水戸藩祖威公ノ頃

初メテ漁業税ヲ納ム 其ノ人名左ノ如シ

元網又兵衛 與衛門 弥兵衛

与一右衛門 源兵衛 吉郎兵衛

三 其後斯業益々盛ニ 義公ノ時ニハ 三十二人ニ及
ベリ

四 相傳フ往古 本町字惣根ニ大山民部トイフモノア

リ 独立ヲ以テ寺ヲ建ツ大山寺ト号ス 民部大洗

神社ニ奉仕ス 祭典ノ日ニハ長棒ノ筭與ニ乘リテ

至ル

五 同時ニ字宮田ニ宮田將監ナルモノアリ 大山ト共

ニ常陸長者ト称セラレシト 今圃中ニ一小森アリ

里俗將監様ト称ス 其ノ中ニ小祠アリ

六 大学院鈴木氏ハ天正年中ヨリノ旧家ナリト

七 鈴木氏ハ紀州藤代ノ武士

八 関根氏ハ本町ニ居住スルコト五十三世ニ及ブ 家

ノ記録ニハ 文禄年中ヨリノ事ヲ記スト 大洗明
神ノ御禱ハ永世当家ノ奉納スル所ナリキト

九 元網又兵衛氏ハ 天保飢饉ニ貧民ヲ賑ハサンタメ

金二百両ヲ義捐シ ナホ 千二百五十両ヲ無利息

ニテ貸付ケ 庄屋全之允モ其ノ金ヲ借リタリト

一〇 水戸藩内証ノ際ニオケル人物

イ 古渡理平 郷士タリシガ天狗ニ属セサルタメ 市

川勢ト看ナサレ 元治甲子攘夷党ノ本町ニ入ルヤ

難ヲ行方郡ニサリ 明治元年攘夷党 再 国ニ入

ルヤ 父ト共ニ東京ニ潜伏ス 後駿河ニ移リシガ

ヘ 服部東馬氏 水戸藩ノ指南役浅田富之允ニ從ヒ

上総山辺郡大網ニテ父ハ遂ニ病死セリ 六年一月

水府流ヲ学ブ

帰郷シテ新治県庁ニ自首ス

元治甲子八月十六日 味爽水門館勢ニ從ヒ湊町ノ

ロ 坂場勇太郎 船庄屋ヲツトメ郷士タリ 一橋公ノ

敵営ヲ襲フ 矢倉方住吉惣兵衛ト共ニ大吉佐四郎

護衛トシテ京都ニ上リ 軍曹トナリ鳥羽伏見及奥

ヲ初めメ二十余人ノ敵ヲ斬ル

羽ニ転戦 賞典禄ヲ賜ル

事平キテ幕兵ニ降り湊町檀原神社ノ祠官トナリ名

ハ 坂場熊太郎 関根秀彦 小貫忠三(二十分一役)

ヲ知之ト改ム

大塚修理(大洗祠官)ノ諸氏ハ攘夷党ニ属シ一旦幽

一一 祝町莊屋ハ願入寺所領タリシ故 同寺ヨリ命ジ来

囚トナリシガ無事帰郷シ

リタリ 初メテ命セラレタルモノヲ作兵衛トイフ

ニ 永井玄洞氏ハ幽囚中死亡シ 菊池魁介氏ハ同ジ

天保年中 磯浜庄屋之レヲ治メシガ 元治慶応ノ

ホ 加藤市太郎氏モ天狗党ニ出テ 前川栄太郎氏ハ田

頃 願入寺ヨリ鈴木作重氏ニ命ズ

中組ニ出ツ

一二 妓楼ハモト十二戸許可セラレシガ暴行武士 長瀬

林藏ノ事アリテ 七戸ハ断絶セラレ ナホ且 武士ノ風紀維持ニ関シ他ノ五楼モ宮ヲ差留メラレシガ 百方哀願ノ上許可セラレタリ 是ヨリ妓楼ハ五戸ト定ル

下ニ進ム 嘗テ湊町ニ来リテ興行ス 土地ノ侠客 櫻村小重ト相争ハントシタルコトアリ タマタマ 政子屋ナルモノ廃業セシカバ 其ノ跡ヲウケテ創業ス

一三 成田屋権重ハ五楼主ノ一人ナリ頗ル俠氣アリ 時

一五 文久年間ノ五楼

ニ小田原城主大久保加賀守ノ臣 鳴瀧万助ナルモ

常磐屋清五郎 抱娼妓 三十一 禿十二

ノ同僚浅田某ヲ殺害シテ当地ニ来リ 馬場前ニ居

小松屋弥兵衛 二十三 十

住シ甘酒売ヲ業トシキタリ 其ノ二孤 浅田紋次

海老屋万右衛門 二十四 十一

郎 同鉄之介・尋ネ来リテ万助ヲ索メ遂ニ仇ヲ復ス

白木屋庄兵衛 二十七 十二

此ノ復仇ニ成田屋主人ノ二孤ヲ救ケテ便宜ヲ与ヘ

鹿島屋大吉 三十 十

タルコトスクナカラズ

計 百四十八人 五十四人

一四 鹿島楼ノ創業者ハ鹿島郡ノ人 江戸相模ニ入り幕

一六 同年間ノ芸者 二十四人 引手茶屋 八

以上 三浜志

地ナリ

但シ先年洪水ノ砌リ川欠ニナリ 村留ニハ有ルト雖モ無キ

(二) 人物 二

第九章 官公署

寛永十一年祝町並木植立ニナリ 若松ノ緑ニ因ミテ見取

(一) 県立水産試験場

山トイフ

明治三十三年四月一日 県令第二十号ヲ以テ告示セラレ

コノ頃 関根若狭トイフ者 宮田一円へ願ヲ立テ松ヲ植

同 五月三日 設置

ウ 郡官ヨリ賞詞セラレ為加恩 道境ノ西北見通ヲ拝領ス

事業ヲ左ノ三部ニ分ツ

ヨツテ南角へ供養塚ヲ作り法華經一部ヲ埋ム 八月十五日

漁撈部 漁船 漁具 漁法及一般漁業上ノ事

供養ヲ営ム 而シテ植樹費ハ金百三十兩 村人 旅人マテ

製造部 水産製造業及販路 運搬ノ方法

手伝フ 手伝ノモノニハ赤飯ヲ馳走ス

養殖部 各種魚介 藻類ノ養殖保護 漁業基本調査

同十八年検地始ル 庄屋 介十郎 茂作 案内トナリ首

最初ノ場長ハ若月貫一氏 次ハ松村

尾ヨク相スミ 庄屋茂作へ沖ノ洲 田九畝十九歩下サル

現在ハ佐々木沖太郎氏ナリ

(二) 漁業事務所

磯浜築港内ニアリ 現任技師松尾樹氏ナリ

明治二十五年一月許可 鴨志田源介氏所長トナリ後数回

(五) 磯浜郵便局

更迭 現在ハ関根栄介氏組合長タリ

明治七年二月五日 大貫村ニ於テ開始シ大貫郵便局ト称

モト本町ハ浜方ト称シ漁業上ノ事ヲ管理ス 之レヲ船庄

セシガ 二十三年十二月九日 当町ニ移転シ今ノ名ニ改ム

屋トイフ 天保中坂場宇右エ門氏初メテ命セラレ其子勇太

三十年八月十一日 電信開通ノ際磯浜郵便電信局ト称セ

郎氏ニ伝ヘタリ

シカ 三十六年四月一日再今ノ名ニ復ス 現局長鳴川治三

(三) 巡查部長派出所

郎氏通信

明治六年十月 新治県銚田検事出張所 同八年五月 銚

(六) 大洗郵便局

田検事第一出張所第二屯所ト改称 十年三月 水戸警察署

明治四十一年六月十六日 磯浜郵便局ノ支局トシテ事務

磯浜分署 同三十五年十月一日 湊分署巡查部長派出所ト

ヲ開始シ 専 夏季遊客ノ便ヲハカル

ナル

後 今ノ名ニ改メ 夏季凡ソ三ヶ月間ノ無集配ナリ

(四) 磯浜築港工務所

(七) 磯浜町役場

明治五年 戸長ノ制出スルニ際シ 区長一人戸長二人ヲ
ヲ為シ慎重調査ノ上 四十三年度以降継続事業トシテ 四
オキ私宅ニ於テ其ノ事務ヲトラシム 十二年通常県会へ提出ノ結果可決セラレタルニヨリ 更ニ

同八年 今ノ位置ニ区長一人 戸長三人ヲオキ事務取扱
四十二年三月細測ニ着手シ 同年五月之レヲ終リ 十一月
所ト称ス 十一年十一月郡区編成ニ依リ区長ヲ廢シ戸長ヲ
二十七日起工式ヲアグ

一人オキ 磯浜村戸長役場ト称ス 二十二年三月 町村制
東防波堤ハ 久下磯ニアル三角点第三十九号ノ東百〇七
実施ノ時ニ当リ戸長ヲ町長ニ改メ磯浜町役場ト称ス 間ノ海岸ヨリ起リ一直線ニ西南ノ方向ニ進ミ百六十五間ニ
終ルモノトス

第十章 磯浜築港梗概

其ノ計画ハ明治三十三年 柏田知事ノ時代ニ土地有志ヨ

リ築港ノ請願ヲ為シタルニ胚胎ス 三十五年県当局調査費

ヲ設ケ 翌年二月漁港調査トシテ磯浜湊間ノ実測ニ着シ

其後三十九年十二月ヨリ四十二年六月マテ数回之レガ補測

其幹部ノ構造ハ起点ヨリ四十五間ノ間ハ 岩盤ノ上ニ

上巾十二尺内外練石垣ヲ築キ更ニ高三尺巾三尺ノ胸壁ヲ設

ケ其ノ頂ヲ零点上十二尺五寸トセリ 是レヨリ先ハ総テ混

練土方塊ヲ用ヒ 其ノ頂部ニ場所詰混凝工ヲ施スモノトス

四十五間オリ六十三間ニ至ル間ハ 上巾十二尺 六十三

間乃至百五十九間ノ間ハ 上巾十六尺 高ハ通シテ零点上 示サバ左ノ如シ

八尺五寸

突端ヨリ二十七尺ノ内ニ鉄製燈台ヲ安置シ 其ノ燈光ノ (全部訂正)

大潮時ニオケル港内水面積

高ハ零点上四十五尺トス 光力八海里 白色アセチリン四

約二万五千三百坪

秒明 二秒暗

大干潮時ニオケル港内水面積

以上ハ第一期即東防波堤ニ於ケル工事ノ大略ナルガ尚ホ

約二万千百坪

将来起工スヘキ第二期計画ニ属スル西防波堤ノ予定工事ハ

船入場水面積

寧々防砂ノ目的ヲ以テ築造ノ必要アリ 其ノ延長ハ二百間

○約一千五百坪

船入場ハ繫船ノ安全ヲハカルタメニシテ 其ノ面積約千五

埋立地面積

百坪トス 埋立地ハ本港ノ發展上魚市場又ハ冷蔵庫等ノ建

約四千五百八十五坪

設地トスルモノニシテ 其ノ面積約五千坪トス

港口巾

今如上ノ設計スヘテ完成スルモノトイシテ 其ノ結果ヲ

約四十間

港口水深

大千潮面以下十三尺

船入場入口水深

同上 六尺

荷揚場護岸前水深

同上 三尺乃至六尺

東防波堤ニ於ケル工事ノ予算

工事費 金十四万七百七十二円

機械費 金二万三千六百八十四円

計 金十六万四千四百五十六円

外ニ雜費 金五千四十四円

總計

金十六万九千五百円



第十一章 名勝及旧跡

我磯浜町ハ丘ヲ負ヒテ海ニノソミ川ヲ隔テ、田園接シ
 到ル所景勝ノ地多シ 加フルニ永ク水戸候ノ治下ニアリ海

防交通ノ要津ニ当リ名勝旧蹟ノアグ可キ者頗ル多シ

三島中洲

(一) 大洗

夜登百尺海湾楼

極目何辺是米州

東海ニ斗出スル三町余 老松山ヲ囲ミテ清泉静ニ流レ

慨然忽發遠征志

月白東洋万里秋

奇岩屹立シテ 怒濤万丈 実ニ東海ノ絶景ナリ 近時都人

ノ多遊漸ク多カラントスルニ際シ 海波常ニ砂礫ヲ運ビ来

龜井有斐

リテ 巨巖漸々埋没セントスルハ惜シム可シ

百尺高楼眺望宣

布帆無数孕風馳

磯ノ月

水戸義公

揮来橡筆氣磊落

万里波濤作墨池

あらひその 岩にくたけて 散る月を

一つになして かへる月哉

齊藤竹堂

大洗

長岡護美

韓蘇手段浴窺難

去上海山高處看

危礁浪触雲山頽

万里長風勢壯哉

始識文章真面目

東洋万里大波乱

東指米州天接水

大鯨露背日辺来

細川潤次郎

あら磯に咲きにたへせぬ浪の花

誰がさゝくらむ 神の廣前

本居豊穎

御供せし夫かあらぬか白浪の

中ふ打ちかけぬ岩か根もなし

小中村 清矩

鯉釣る小舟にそへて和田の原

限も波にこころを居やる

黒川 眞頼

大洗の磯辺をきよみ大神の

心も茲によりきましけむ

久米 幹文

大洗の岩か根まくら夢の間に

夕波涼し秋やたつねむ

福羽 美静

これやこの神のみてくらあめりかの

神より貢く波のしらゆふ

うえしこそ神の心になふらん

浦波きよしみたらしもよし

治まれる御代の姿もあらはれて

のとかに霞む磯の浜波

常陸なる田なべの磯に来てみれば

風も吹かぬ白浪で立つ

高崎 正風

朝夕はいまやみつらむ磯さきの

いまはまばらになりになれるかな

(二) 子の日野原

大洗神社より北方の地 標高二十五米突乃至三十米突

あかねさす出る日影にわかれけり

同じみとり (緑) の水と空とは

青々たる原野ひらけて直ニ海ニ迫り座して水天の髣髴たる
を眺む可し 天保十二年十月源烈公此の地の風光を愛て

高崎 親章

自筆の碑を建つ

波風に洗ひきよめて神垣の

萬代を満津に契りてけふこそは

まつの下かけ涼しかりけり

子の日の原にひかれきにけり

春は摘草に秋は虫聴に常に兒童の嬉遊する所たり 諸団

烈公の歌二

体の運動会も亦多く行はる

眠るまも夢にみつ帆の夷松えびす

井上 毅

くたかむ丸た宝なりける

山守よ心して守れ子の日の原

平面図ヲ別紙ニ掲グ 但シ 飛砂の甚しきと明治二十年

乙女小松の千歳経るまで

頃植付ケル松樹ノ為メ イタク原形ヲ損シタルモ遺跡歴々

トシテ猶見ル可シ 砲ハ七八百目砲より稀ニハ一貫目砲

(三) 御台場

平日ハ砲庫ニ蔵シ必要ニ応じて台上ニ据

那珂川河口ノ右岸 標高〇〇米突ノ丘廓 幕末辺海警ヲ

里謡 「お台場の土か昇かき さきでまゝ喰かつて二百と五十コイ

伝フルヤ 水戸烈公此ノ地ニ砲台ヲ築キ湊反射炉ニ鑄ル所

ツ又うまいな。」

ノ巨砲ヲ据エテ海防ノ魁さきがけヲ為ス 当時ノ郡方手代菊池忠

衛門

(四) 磐船夕照

築造年代 弘化―嘉永年間 土手藏ニ棟火薬ヲ

磐船山ノ北麓 那珂 涸沼ニ川合流スル崖上ニアリ 脚

下ハスナハチ深知ル可カラズ 田園遠ク西北ニ開ケ 夕陽

藤田東湖

筑波ノ彼方ニ沈ムトキ美觀イフ可カラス

入日さす山のふもとは霧深み

烈公水戸八景ヲ選フトキ 此ノ地ヲ其一トシテ巨碑ヲタ

天の河原に浮ふ磐船

ツ

磐船山看花

水戸義公

本間 正行

山寺芳桜射我眸 玉幡瓔珞飾磐船

潮生袖浦漠舟回 春雨忽晴珂水隈

有花此地即華蔵 九品蓮台何遠求

欲拳巨杯吊古跡 夕陽空射磐船台

願入寺の彼岸桜をみて

同

(五) 那珂川

さす棹も花の名におふかのきしる

水源ハ下野那須皿ヶ嶽 他ハ塩原山 佐良土ニ至リ 二

よするや 春の法の船人

流相合シ当国ニ入り 東茨城 那珂二郡ノ境界ヲナシ 遂

ニ海ニ入ル 全長?

各種ノ河魚ヲ産スルモ 上流ノ鮎 下流ノ鮭特ニ美味ナ

自憐身世常無之 昨日離郷却望郷

リ 湊町ニ通シテ橋梁アリ海門橋トイフ 明治二十八年十

月初メテ竣工 洪水ニ破壊後 三十一年三月再仮架設 長

サ百二十間 幅三間 欄ニ倚リテ河口ノ怒濤ヲミル特ニ壯

觀ナリ

那珂川を船にて下るとき 水戸烈公

打渡し今日はみたゝ入所とも

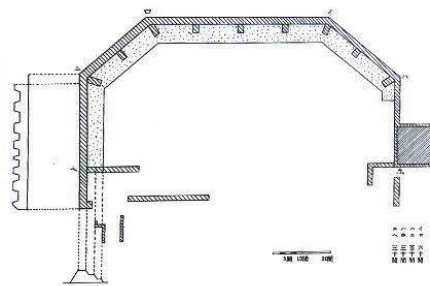
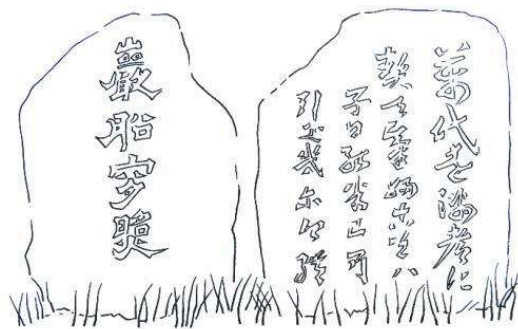
知らて漕きしく夜半の川船

下中川赴水府 蒲生 君平

百里中川傍緑芳 日晴雲村共蒼々

長倉葦岸余春色 細苦烟村帯夕陽

緑枕笈中書懶出 驚波舟裏夢難長



(六) 見通

願入寺門前ヨリ坦々タル一條ノ大路直ニ海ニ入ル寺域ニ

座シテ青海ノ洋々タルヲ望ミ得ベシ 嘗テ田口掬汀氏ノ少

説 伯爵夫人ニ描カレテヨリ 其ノ名都人士ノ耳ニ入ル

(七) 海防御陣屋

壽町裏手高丘(標高三十米突乃至三十五米突)ニ設ケラレ
タリ 天保五壬午歳 源烈公ノ建設スル所 初先手組ヲシ

テ守ラシメシカ 同十三年丙寅ノ歳物頭ヲシテ来住セシメ

ラル 初任ヲ岡野庄五郎トイフ 最終ノ物頭ヲ鈴木庄蔵ト

イフ 水戸内訶ノ時 攘夷党与シ一方ノ将タリシカ 幕府

ニ降りテ死ヲ賜ハル

(九) 真端ノ橋

中池ノ辺ニアリ いにしえ 古八幡太郎 奥州征伐ノ際通過シタ
ル所ナリトイヒ傳フ サレド今既ニ其ノ形ヲ失フ

以下記述スル所 或ハ其ノ形既ニ失セテ尋ヌルニ由ナキ

モノ 或ハ其ノ名サヘ忘ラレテ古老ノ知ラザルモノ等一ナ

ラズ サレド口碑口傳ノ年ト共ニ益々失ハレンヲ恐レテ茲

ニ記セリ

(八) 二十分一検問所

金 沢

旧水戸藩ノ頃 漁獲セシ魚ノ二十分ノ一ヲ税トシテ徴収

谷津ヶ峯ヨリ清泉出ツ之レヲ金沢トイフ 元禄年中之レ

セシ處ナリ 明暦三年ヨリ始マルトイフ 其個所ハ今ノ旭

ヲ永町マテ引キ一街二三井ヲ作りテ飲用水トシタリ 此ノ

町一町目 桂町三町目 同五町目ニ在リタリ

土工一ヶ年ヲ費セリ サレド使用スルコト三四年ニシテヤ

ム 此ノ地名今旧町名トナリテ残ル

ト傳ヘラル

車塚

日下カ塚

往古尊キ神ノ降りマセル所ナリト

たけみなかたのかみ
建御名方神ヲ祀ル小

東方畑地ニアリ其ノ坪数一町三段三畝十歩 先年中ハ曲

社アリ

たま
玉類ヲ掘出シタルコトモアリシト

姫塚

呼ハリ塚

尊キ姫神此ノ地ニ降りテ 隠レマセリト 因テ姫カ愛あい翫がん

涸沼川ノ右岸ニアリ 坪数八畝十五歩バカリ 相伝フ昔

ノ琵琶ヲ蔵シテ祭ル 大塚又ハ諏訪塚

漁船ヲ出ストキ川又ニ住スル漁夫ヲ呼よブハコノ塚ニテ 貝

供養塚

ヲ吹キテ集メタリト 此塚一ニ機織塚トモイフ はたおりづか 源義公嘗

原山ノ西側ニアリ 寛永年中元綱又兵エ松苗千株ヲ植エ

テ此ノ塚ヨリ水底ニ入り織姫ニ会ヒテ帰リタリト

経文ヲ転読シテ供養シタル所也

谷津ケ峯

行人塚

養福院ト西福寺トノ間ノ狭間ヲイフ 今現当谷津トイフ

四面畑地ノ中ニアリ古松七八株現存ス 行者ノ遺趾ナリ

檜山 椿山

前者ハ往古加藤氏ノ居処 後者ハ大塚氏ノ居宅 一ニ伊 至ルマテ尊崇スルモノ絶ヘズ

勢守古屋敷トイフ

ドンドン山

祝町 那珂川ノ岸ニアリ モト此ノ下西町ニハ水戸藩ノ

御舟庫アリタリシカ 享保八年七月洪水ニテ河岸破損シタ

ル際 松波勘十郎 之レヲ港町ニ移ス

曲松

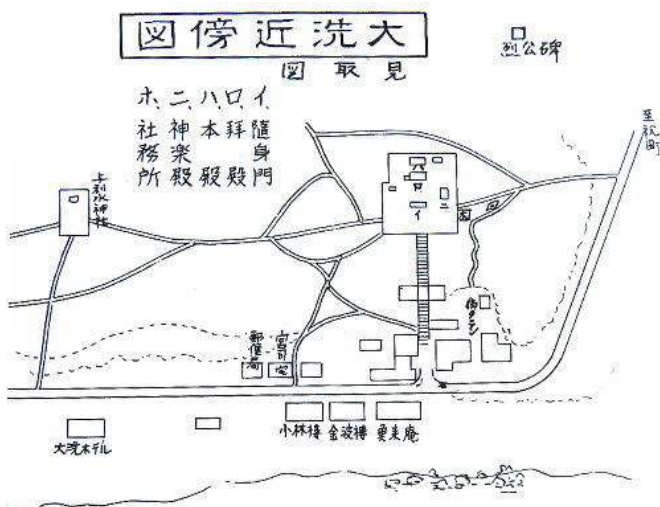
今郵便局前ナリ コノ松ハ下ヲバ馬上ニテ通行モ出来タ

リトイヘリ

相生松

祝町モト郷倉附近 モト神木ナリトイヒ傳ヘシガ 天保

ノ暴風ニテ一度枯レタリ 其ノ小サキモノ別ニ生ジテ今ニ



第十二章

以テ架設シ 毎年入札ヲ以テ橋錢ノ收入ヲ請

(一) 道路

ハシム

国道 なし

橋錢大人一人 金五厘

県道 一 鉾田町ヨリ湊町街道

大正二年六月ヨリ県有ニ移ル

二 本町ヨリ東京ニ至ル街道(一・二 三十二町)

海門橋 湊街道那珂川ニ架ス 長サ百二十間 私設ナリ

里道 重ナルモノハ

橋賃大人金一錢

一 郡役所ヨリ大洗ニ至ルモノ

大正二年三月ヨリ県有ニ移ル

二 本町ヨリ長岡村ニ至ルモノ(一・二 二十三町)

(三) 渡船場

郡役所へノ里程 三里二十三町

一文船渡 願入寺裏ヨリ川又ニ通ズ 初夏 晩秋ノ眺ヨロ

溝渠延長 四二〇〇間

シ

(二) 橋梁

槇河岸ヨリ川又ニ通スルモノ

酒沼橋 水戸街道酒沼川ニ架ス 長サ八十四間 町費ヲ

(四) 人力車及客馬車

人力車 五十一 荷馬車 四

客馬車 一三 荷積馬車 五六二

自転車 八八

客馬車ハ水戸ニ往復ス 発車時刻等規定ナシ

人力車賃錢

一人乗一人輓昼間一里 十五錢

同 夜間 十八錢

馬車賃錢

大洗ヨリ棚町 二十五錢

磯浜ヨリ棚町 二十錢

同 下市 十五錢

(五) 汽船

海門橋畔ニ那珂川汽船株式会社ノ発着所アリ 水戸杉山

以下下流各地ニ通ズ 上リ通常二時間ヲ要シ下リハ一時三

十分内外水戸祝町間乗船賃金表 (註…記載なし)

汽船発着時間表

水戸発

湊発

午前 六時三十分 午前 六時

同 八時 同 八時

同 十時 同 十時

午後 十二時三十分 同 十二時三十分

同 二時三十分 同 二時

同 四時 同 四時

同 六時 同 六時

(一) 明治二十七年度以降町村經濟

年 度	歲入精算額	歲出經常費精算	同臨時費
明治二十七年度	六三〇九二一四	三二五二七二八	二一七一〇七五
明治二十八年度	六四五七五二六	四二一三五九八	二〇七九一二六
明治二十九年度	八一七二〇九〇	四四〇六四五七	三七〇七五六二
明治三十年度	一四七四九八六二	六八五四九六七	七七八五三六二
明治三十一年度	一〇二六九〇四二	八二四六一四一	一二一三七〇九
明治三十二年度	九九三六八八〇	七二九七九一一	三四六四〇
明治三十三年度	一三〇一四〇七四	九三三一二八九	三六五四三九〇
明治三十四年度	一八二四〇七一八	一二五二三八七三	五六五六七四九
明治三十五年度	一四九三五六五七	一〇四九九二一八	四二一五〇七九
明治三十六年度	一二一三一四八六	九三六〇九二四	二五〇三七三四
明治三十七年度	一四八六〇八三〇	一〇五四六八三六	四二一七一七九
明治三十八年度	一五二五三六五四	一四六一九六七七	四一九七一五
明治三十九年度	一五二二〇四八八	一三七一一一八五	五〇四七一八
明治四十年度	二一六一五一〇一	一九八三八五五五	一七〇三六四七
明治四十一年度	一五三七〇六三〇	一三七六一七二〇	六八一〇五七
明治四十二年度	一六二五九〇三三	一五一四二四二二	八五六七四〇
明治四十三年度	一八一六三六四二	一五一七一七一〇	六五八三一〇

(二) 租 税

明治四十五年度

宅地租 二九六四円六七
 地租 一五四二・〇三五
 国税営業税 五三四〇・六七
 売薬営業税
 県税営業税雑種税 二六四五・六七

大正二年度

宅地租 四五〇四・六九〇
 地租 二四〇九・一二〇
 所得税 四四六六・九六〇
 売薬 九・〇〇〇
 県税営業税八三七・四二〇
 国税営業税附加税 五四九・四三〇

漁業税 一七二三・四〇
 月税 五八五・七五
 県税戸数割 三〇三六・〇〇
 所得税 二四二八円〇六

所得税附加税 一〇六
 売薬税附加税 〇・二七〇
 地租割 一二三三・二五〇
 雑種 四三三三・五三〇

(三) 町税

四十五年度

地価割 五九〇円四〇
 国税営業割 六四〇・九二〇

大正二年度

地価割 五九〇・五二〇
 国税営業割 六七〇・〇四〇

県税営業割 二八八九・三八〇
 戸別割 九三八一・二四〇
 所得税割 三六四・二〇〇
 県税雑種税附加税 二四九四・八七〇
 売薬税附加税 〇・四五〇

(四) 祝町ニ於ケル郵便電話其他

郵便物

集配回数 四回

個数 (註：記載なし)

参考ノ為 切手売捌所ニオケル売上高ヲ示セハ

はがき	六〇〇枚
三錢切手	三〇〇枚
其ノ他ノ切手	一〇五〇枚

(五) 電話

港 第二番八本町唯一ノ特設電話ニシテ 加入者ヨリ本

町民一般ニ通話ノ便宜ヲ与フ

通話回数一日約 (記載なし)

(六) 郵便貯金

四十五年七月現在

	貯金人員	貯金金額
小学児童	三〇	一五二円一九
矯風会	八九	一〇七二円八〇五
其ノ他	約三〇	

(七) 産物

明治四十五年実収

各種農産物

一、〇五〇石

価格

一八六、九〇〇貫

一三五六九円

海産漁獲物

三八二、九一九貫

一九五〇三一円

淡水産漁獲物

一、六八〇貫

一四六〇円

水産製造物

二二、八八〇貫

三五〇九五円

醤油

二九〇石

五三〇〇円

清酒

六八〇石

一四七五一円

味噌

三八、二〇〇貫

一三三二四円

牛乳

四八石

一四四〇円

(八) 漁業

期間ニ依リテ三職トシ 各職最高漁獲者ニ対シテ 県知
事ヨリ優勝旗ヲ授与サル

春職 鱈漁 雑魚 鯉漁

夏職 鯉漁 雑魚

秋職 秋刀魚漁 鯉漁 鱈漁 雑魚

(九) 漁法

鱈漁 八坂網 揚操網 都突網ヲ使用シ後者ハ二艘

前二者ニハ四艘ノ船ヲ使用ス

鯉漁 一艘ニテ釣針ヲ用フ

秋刀魚漁 流シ網ヲ使用ス

鱈船 網

章魚船

甕

姥貝船 マンガ

其ノ他ノ雑魚 多クハ釣ル

(十) 休日制度

旧来ノ習慣ニ依リテ之レヲ行ヒ 祝祭日 日曜等ニ休ム

者殆ニ無シ

漁業家ハ船止ト称シ 正月元日 及大般若ノ日 三月二

十三日ノ天妃祭 八朔

商家ハ正月元日 孟蘭盆会うらぼんえノ十六日 正月及十月二十日

ノ恵比寿講

農家ハ正月 五節句 盆 八朔 天妃祭 早苗振り 太

郎ノ八日(正月二十八日) 次郎(旧二月)ノ朔 旧十月十

日 霜月十五日 師走八日

第十四章 風俗習慣

(一) 十夜

西福寺ニテ行フ宗祖会ノ事ナリ 十月六日夕ヨリ十五日朝マテ 此ノ間 毎夕刻ヨリ本堂ニ於テ読経アリ 後檀家ノ位牌ヲ紙ニテ記シ之レヲ重ネオキテ 伺誰頓生菩提ト読

初メノ番ニ当リタルモノハ其年不漁又ハ災難ニ遭フトイヒテ 以前競ヒテ早く出ツクヲ嫌忌シタルナリ

(三) 大般若経

ミ行ク 俗ニ之レヲ明神町^{みょうじんちやう}勘太郎頓生菩提トイフ

陰曆正月二十一日旭町ニ初リ二十三日寿町ニ終ル 此ノ

蓋シ其ノ読ミ始メガ斯克ノ通りナルニ由ル 此ノ儀了リ

日ハ若者 西福寺ヨリ大般若経蔵ノ長持ヲ担ヒ来リ未明ヨ

テ後 談議僧ノ談話アルヲ毎夜詣ツルモノ多ク 堂内殆ニ

リ「御経々々」ト連呼シツト各人民ノ家ニ担ヒ入ル

立錐ノ地ナシ 勝栗坊主ノ御談議トテ頗ル面白キウチニ教

(四) 節分

訓ヲ加フルニ依リテ有名ナリ

大洗社殿ニ於テ神供ノ豆ヲ撒ク 其ノ豆ニハ 福德大漁

(二) 出初

寿等ノ吉祥文字ヲ書キタル豆ヲ得ントテ犇ひしめキ合フ

(五) 潮祭

不漁不漁続キ時 漁夫ノ妻 母ナド 異様ナル身ナリヲシテ

市中ヲ練リ歩キ船主ノ家ニ至リテ踊等ヲナス

三 冗語ヲ冠シ 若シクハ伴フモノ

四 呼称ノ全然異ナルモノ

五 発音ノ約ルモノ

六 添加音ノ有スルモノ

一 発音ノ訛誤

第十五章 言語

イ 拗音が非拗音トナル

(一) 方言訛語

しゆ 朱 し

由来本県ハ言語ノ正確ナラサル弊アリ 特ニ東方辺海ノ

しゆ 主 し

我地方ニ於テ其ノ甚シキモノヲ見ル

しゆ 種 し

今 方言訛語ノ生スル経路ニツキ ヒソカニ考えフルニ

じゆ 儒 じ

一 発音ノ訛誤

しゆい 趣意 しい

二 助辞及動詞ノ語尾ノ変化

しゆえん 酒宴 しえん

じゅえう	需要	じえう
じゅく	祝	しく
じゆく	熟	じく
しゆくふ	叔父	しくふ
しゆくや	夙夜	しくや
しゆせき	手跡	しせき
じゆぜん	受禪	じぜん
しゆつきん	出勤	しつきん
じゆつ	術	じつ
じゆん	旬	じん
じゆんかう	巡幸	じんかう
しゆんぎ	春季	しんぎ

口 清音 濁音ニ変ス

じゆん	順	殉	潤	純	じん
しゆん	駿	瞬	撞	木	しん
カキ	柿	カギ			
キク	菊	キグ			
クキ	莖	クギ			
ユキ	雪	ユギ			
ハタ	旗	ハダ			
ハタ	畑	ハダ			
タタク	叩ク	タダグ			
タタミ	畳	タダミ			
タチ	立	タヂ			

タチマチ 忽 タヂマチ

タテ 縦 タデ

ナカ 中 ナガ

ナツ・アキ 夏・秋 ナツ・アギ

マタ 又 マダ

ミキ 御酒(幹) ミギ

ヲカ 陸 ヲガ

ハ 濁音 清音ニ変ズ

ヲヂ 伯父 ヲチ

ニ ヒノ音 シニ変ズ

子ノ日ノ原 子ノシノ原

ヒガシ 東 シガシ

ヒグレ 日暮 シグレ

ヒク 曳ク(車ヲ) シク

ヒカル 光ル シカル

ヒトリ 一人 シトリ

ヒビク 響ク シビク

ヒト 人 シト

ヒロ 尋 シロ

ヒロイ 廣イ シロイ

ホ シノ音 ヒニ変ズ

ヒシグ へシグ

ヒガシ へガシ

ハ イ、キノ音 エニ変ズ

イス 椅子 エス

イヌ 犬 エヌ

イソガシ 忙シ エソガシ

インシ 印紙 エンシ

キマス 居マス エマス

イテフ 銀杏 エテフ

キナカ 田舎 エナカ

キ 胃 エ

グワイタウ 外套 ガエタウ

サイゴウ 西郷 サエゴウ

ト 語尾ニイヲ有スル語ガ他ノ語ニ先立ツ時ハ 其ノイノ

音訛リテ エニ近キ一種ノ音トナル 而シテ イノ上ノ音モ

変化ヲウク

クワイガウ 会合 ケエガウ

タイコ 太鼓 テエコ

二 助辞及動詞ノ語尾ノ変化

イ 位置 方向等ヲ示ス助辞「ニ」「へ」ハ常ニサト発音セ

ラル

京ニ上ル 京サ上ル

東へ行ク 東サ行ク

湯ニ水ヲサス 湯サ水ヲサス

胸ニ手ヲアテル 胸サ手ヲアテル

正確ナラズ 又ハ全ク略サル

橋ノ上ヲ人ガ

橋ノ上エ人ガ

ロ 名辞ニ附属シテ 他ノ物ト差別スル意ヲ表ハス「ハ」

エヲ見てキル

エエ見てキル

ハ 先キ立ツ名辞ノ終リノ音ト結合シテ常ニ正確ニ発音セラ

新聞ヲ持ツテキタ

新聞持ツテキタ

レズ

ペンヲ買ツテキタ

ペン買ツテキタ

君ハ 何歳カ キミヤー 何歳カ

コレハ コラエ 又ハ コレエ

ニ 或ル事物ヲアケテ他ヲ類推サセル意ニ用ヒル「サへ」

義経ハ ヨシツネアエ

モ亦又 発音不正確ナリ

行キハ シマイ イキヤエ シマイ

鳥サへ

鳥セエー

コレサへ忘レタ

コレセエー忘レタ

ハ 同ジク動作ヲ受ケル事物ヲ示シ 若クハ 動作ノ行ハ

レル場所ヲ示ス意ニ用ヒラルト「ヲ」モ先立ツ語ニ依リ発音

ホ 其他 発音訛ル助詞ハ

モノナラ

モンナラ

学校へ行ク

学校へ行カウ

ケレドモ

ケント

此所ニ居ル

此所ニ居ラア

バカリ

バカシ バツカシ

ソレハ困ル

ソレハ困ラア

モノノ

モンノ

腹ガイタイ

腹ガイテアエ

へ 現在ヲ表スキ(居)ハ先キ立ツ語ノアルトキ省略セラ

三 冗語ヲ冠シ若ノハ伴フモノ

ル

イ 語ノ上ニ冠スルモノ

鳴イテキマス

鳴イテマス

カツ(搔)

カツ斫ル

カツ込ム

見テキマス

見テマス

ツン(突キ)

ツン出ス ツツ伏ス ツツ飛ス

ヒツ(引)

ヒツ掛ケル ヒツ込ム

ト 現在ヲ表ス動詞ノ語尾ハ延長シテ「ア」列ノ音トナ

ヒン(引)

ヒン抜ク ヒンマゲル

ル

ブツ(打)

ブツコワス フツコロバス

ブン
ブンナゲル
ブンマワス

左様
サウサ

キツ (切)
キツカケル
キツコム

トツ (取)
トツ迫 (チ)メル

四 称呼ノ全然異ナルモノ 之レニ名詞動詞形容詞副詞等其

クツ (咋)
クツチメル
クツ付ク

ノ数最モ多シ

オツ
オツ倒ス
オツコワス

イシケー
ヨカラヌコト

イキレル
暑キコトノ甚シキコト

以上ハ大抵 下ニ来ル語ノ勢ヲ強メ 意味ヲ明カニスル

イデル
凍ルコト

ガ為メノモノナラレドモ 無クバ無クトモ済ムモノト如シ

イジメル
困ラセル

ロ 語ノ終リニ或ル音ヲ伴フモノ

ハラガヘル
餓ルコト

嫌ヤダ
嫌ヤダワイ

イツカル
乗ル

行ク
行クワ

イタメル
苦メル

左様ダ
左様ダネシ
左様ダワイ

ハダケル
廣ケル
披ケル

ハナグラ	イビキ (鼾)	へドモドスル	
バンゲ	今晚	ドウドウ	馬(小児語)
ポカン	恍然トスルコト	トハ	戸外
ホエタレル	泣ク	トンデモナイ	
ハンギリ	飯櫃	ドツサリ	沢山
ボンクラ	機転ノキカクコト	ドザイム	水死人
ボナラ	呻ク	チャガレル	声ガ嘎レルコト
ホラ	霊言	チク	霊言
ボツタ	漁夫ノ平日着	チント	少シノコト
ボヤ	藪	チョツカイ	手早
ヘツツヒ	竈	チワ	唾液
へド		チャカス	嘲弄スル

ヌクヒ	暖イ	ツマラヌ	
ワレ	汝	ネンネ	赤子
ガシヤツパ	落葉	ナカマ	親族
カマギツチヨ	螳螂	ムクル	剥グ
ヨバレル	馳走ニナル	オツケ	汁
ヨマイゴト	怨言	オツツカナイ	収支相償ハヌコト
ヨツパラ	飽クマテ	オカタ	女房
ヨイ	互ニ手伝ヲ仕合フコト	オコレ	下サイ
ダダヲコネル		オベツカ	阿 <small>おもねら</small> レルコト
ソバヘル		オキリ	火
ソベル	仮寝スル	オコ	餡
ヅルイ	ヅウヅウシイ	オツ	ヲカシイ

クネ	垣根	フケル	姿ノ老イ込コト
クエナイ	狡猾ナコト	ゴウゴツト	急イテ
クダキ	唾	コツペイクサイ	巧者デアルコト
ヤル	物ヲ人ニ遣ハス	コケ	愚
ヤル	或ルコトヲ為スコト	デカイ	大キイ
ヤシンボウ		テツコニオヒナイ	
ヤタラニ	シキリニ	テテ行ク	連レテ行ク
ヤアハ	損ジヤスキモノ	デスツパキ	言行ノ無遠慮ナルコト
マジク	悪口スル	アエーブ	歩ム
マツザラ	松ノ落葉	アテコトモナイ	沢山ナ
ケイハクスル	媚ビル	サアサツテ	明々後日
フダ	沢山	キドコロネ	仮寝

キビチヨウ

急須

メツコ

メツカチ
すがめ 眇者

シメス

長者ガ幼者ヲ教育スルコト

シヨク

机

ピーツク

鼻ノ低キコト

モウ

沢山

五 発音ノ約ルモノ

ヤマカガチ

亦斑蛇

ヤマガチ

カハウソ

獺

カラス

ヤキギル

焼切ル

ヤギル

アニギミ

兄君

アニキ

キヒツ

木櫃

キツ

ヒタアグラ

ビダグラ

六 添加音ヲ有スルモノ

アタラモノ

可惜物

アツタラモノ

同ジ

オンナジ

ノヒル

野蒜

ノノヒル

ババ

馬場

バンバ

ヤキハイ

焼灰

ヤギツパイ

ノ

野

ノラ

ジギ

辞儀

ジンギ

ネム

合飲木

ネムタ

ザル

箎

ザール

ヨミタリ

讀ミタリ

ヨンダ

アネ

姉

アンネ

ハ 促音便

ソレバカリ

其許リ

ソレツパカリ

モチテ

持チテ

モツテ

コクナル

濃クナル

コエクナル

オモヒテ

思ヒテ

オモツテ

……スルト云フ

……スルトア云フ

チリタリ

散

チツタ

七 音便ノ變化ト見ルベキモノ

イ イ音便

ナキタリ

鳴キタリ

ナイタ

コヤツ

此奴

コイツ

イソギテ

急ギテ

イソイテ

アトホキ

跡祝

アトフキ

ロ 撥音便

トビタリ

飛ビタリ

トンダ

ドロ

泥

デロ

シジミ

蜆

シジメ

ニ 発音ノ轉化ガ五十音圖ノ各行間ニ行ハルモノ

カナグ

金具

カナゴ

ザシキ

座敷

ザスキ

クル 来ル キル

マユ 繭 マエ

ニエル 煮エル ネエル

テヌグヒ 手拭 テノゴヒ

モル 漏ル ムル

マナコ 眼 ヤナク

スミ 隅 スマ

トヒ 樋 トヨ

ホ 発音ノ転化ガ五十音図ノ各列ニ行ハルモノ

オナジトシ 同年 オナイトシ

ヒモ 紐 ヒボ

ムカデ 蜈蚣 ムカゼ

バツシ 末子 バツチ

アツメ 集メ アツベ

(二) 俗 謡

手毬歌

正月門松 二月初午 三月雛サン 四月ハ釈迦サン 五

月御節供 六月天壬 七月七夕 八月八朔 九月御神事

十月夷講 ユフヘ夷講ニ呼ハレテ参ツタラ 鯛ノ浜焼鱸ノ

吸物 カネノ御箸テゼンゼンザクザク マズ一杯吸ヒマセ

ウ……十杯吸ヒマセウ 十杯トロロニ当テラレマシタ

一二橘 二二燕子花かきつばた 三三下り藤 四四獅子牡丹 五五

キル 伊勢ノ拾度ノ曲リ松ノ下ヲ 七ツナル子ガ八ツ子ヲ

山ノ千本桜 六紫桔梗ノ花ヨ 七ツ南天ポンポノ花ヨ 八

産シテ産ムニヤ産レズ 落スニヤ落チズ 向フ通ルハオ医

ツ八児ニ急せカレテマキル 九小梅ハチラホラ落チル 十デ

者ジャ無イカ 医者ハ医者タカ薬箱持タヌ 薬御用ナラ袂

殿様葵ノ御紋 竹二雀ハ仙台様ノ御紋

ニ御座ル 袂薬ハキカナイサウデ ケイ六センデ一カンヨ

一二長岡大工町 大工町ノ庄屋サン 庄屋ノ娘ハオ多野

羽子板

トイフ オ多野ノ惣領 孫三郎 イクラ継子ガ憎イトテ蒲

一月二月三月桜 桜ノ本ニオ嬢サント小嬢サン 何事ナ

団ニカラメテ帯シメテ 戸棚入レテ錠カケテ息ガツマウテ

サル 髪結ナサル 髪結ツテ何処行クノ 御針ニ行クノ

死ンタトサ 其ガ御上ヘ聞エテ忽チ牢屋ニ入レラレタ

町カラ若衆七人連ヨ 何ガ目ニ付ク出テ見口小女郎 小

モーンメモジロ モシロノ母ハ糸ヨリ細イ細ケリヤ ウ

女郎帷子ニナノハナノ帯 帯ヲ廻シテ後チャント締メテ

メロ 太ケリヤ削レ 柳ノ下ニ石灯笼立テゝ金灯笼立テゝ

締メタ所ヘイロハト書イテ 伊呂波読ミ読ミ 伊勢伊勢マ

グルグルメグツテ一カンス

一人来ナ二人来ナ 三人来タラハ寄ツテ行キナ 何時来
て見テモ 七子ノ帯ヲ矢ノ字ニ締メテ ケノ六センデハ一
カンネ

スゝキ 山吹 柿ノ木 セツセ オ千トオ万ガ米セツセ
南瓜ニ目鼻カ付イタカポンポ ポンポヤ桜牡丹ノ花ヨ オ
和尚サンガ厭ナラ 格子作りノ白壁作り 紺ノノレンノオ
嬢様ヘト オ渡シ申ス慥ニオ渡シ申ス

御手玉

カツ切り十ヨ 一 二 三 四 ……
カツキリ十ヨ カツキリ二十 カツキリ三十
カツキリ四十 カツキリ五十 カツキリ六十
カツキリ七十 カツキリ七十 カツキリ八十
カツキリ九十 カツキリ百ヨ
ココノツ十ヨ ココノツ二十 ……

一ヤ二ノオ宮ハ 切りニ刻ンデ 袂カラ火ガ出ル 裏ノ
棹カラ 雀ガ三羽出テ 一ヤポツポテ一丁貸シマシタ オ
サラリ オ一ツオ一ツ ……オロシテ オサラリ
オ二ツオ二ツオロシテ オサラリ オ三ツオ三ツオロシ
テ オサラリ オ皆 下シテ オサラリ オデシアゲ オ
手シ上ゲ 下ロシテ オサラリ オ手挟ミ オ手挟ミ 下

ロシテ オサラリ

オ種モカツキリ 序ニ越エロ オサラリ ドノ玉(此ノ玉)

オチリンコ オチリンコ 下ロシテ オサラリ オ左オ

此ノ玉一緒 此ノ玉二升 …… 三升 …… 一斗デカツ

左 下ロシテ オサラリ 中ギリ 下ギリオサラリ

キリ

テツツキ ショツツキ オサラリ オチョンナ オチヨ

ンナ 下ロシテ オサラリ オデツブシ 竹ノフシ 本カ

子守歌

ラ切ツテモ 切レナイモンダヨ オロシテ オサラリ バ

守リツチャ 楽ナ様デ ゴハイモンデス 雨風吹ク時宿

ーヤン バーヤン バーヤン バーヤン カツキリ オサ

ハ無イ 人ノ軒端ニ立チ寄レバ 旦那様ニ叱ラレ 児ニヤ

ラリ ヒーロ ヒーロ ヒーロデ カツキリ オサラリ

泣カレ犬ニヤ吠エラレ 追ヒ出サレ

オヒージ オヒージ オヒージ オヒージ オーソデ

オーソデ オーソデ オーソデ オ手バタキ オ手バタキ

坊ヤハ善イ子ダ 寝ンネシナ 坊ヤノオ守リハ 何処へ

オサラリ 奥ノ穴越ユロ 奥ノ穴越ユロ オ種モカツキリ

行ツタ 鹿島ノオ里へ帯買ヒニ 帯ハ七尺 値ハ八十 三

序ニ越エロ オサラリ オセンバノオ橋越セ オ橋越セ

貫高イト オ買ヤル

鹿島ノ土産ニ何ヲ買ツテ来タ デンデン太鼓ニ簫ノ笛

本町ハ由来風流三味ノ区 歌謡ノ人口ニ膾炙セラルトモ

ノ頗ル多シ

ヤイヤイ山ノ中ノカツサキ猫メ 人サへ見サヘスリヤ

磯と湊をはかりにかけて

搔サキタガル

中のととりが祝町

泣クト長持負ハセルゾ 寝ルト鼠ニヒカレルゾ 起ルト

いそて名所は大洗様よ

オキリノ中ヘツツキ込ムゾ 笑フトワラグツハカセルゾ

松が見えますほのぼのと

沖の暗いのはいなさか雨か

拳ヲスルトキノカケ声

烏猫かよ眼が光る

アイシヨウケンデ ヨコスカサイデ

水戸を去ること東へ三里

誰レト組ンデモ ウラミナシ ウラミイツテア 悪イ子

波の花散る大洗

色モ緑の楢形山を

(三) 歌謡

袖ケ浦風すきかくす

海で黄色のはあいなめあなご

月のうかめた浪のいろ

鹿島灘から銚子の沖を

はれて見渡す小春風

袖ヶ浦曲の曙ぞめを

きてもご覧よ磯模様

更けて誰やら磯節歌を

松に琴ひく浦の風

磯の浜では秋刀魚がとれる

とれたさんまは山をなす

(二) 衛生

開業医師 八人 薬剤師 一人 産婆 四人

薬種商 八人

大脇 昌三郎 中根 環

田崎 幹之助 笥 清香

高崎 音三郎 赤石沢正義

辻 虎蔵 永井 貞雄

衛生一般ノ情態

伝染病 患 死亡 計

腸チフス 一 一 二

質チフス 一 〇 一

ジフテリア 一 〇 一

一般ニ良好ナリ 但シ磯浜海岸ノ二区三春季ヨリ 夏季

同 加藤 政吉

ニカケテ 胃腸患者ヲ見ルコトアリ

同 鈴木 仙太郎

壮丁ノ身体狀況ハ前ニ掲グ

同消防手 五十五名

(二) 消防

(三) 避暑遊覽

二訂正ヲ要ス

我磯浜町ハ 景勝ノ地トシテ 海水浴ノ地トシテ 其ノ

組頭 田口 茂兵衛

名遠近ニ知ラレ 毎年早春ヨリ晩秋ニ至ルマデ遠来ノ士殆

第一部長 本多 千太郎

絶エズ 諸学校ノ修学旅行 諸団体ノ運動会 此ノ間ニ屢

第二部長 山戸 千之助

屢行ハル

第三部長 宮崎

憾ムラクハ交通機関うら稍不完全ニシテ 水戸ヨリ電汽車ノ

第四部長 桐原 清四郎

直通スルコトナキ也

同小頭 河上 梅吉

今旅館ノ重ナルモノヲ挙グレバ

大洗

魚来庵

川崎 傳兵衛

金波楼

石井 藤助

小林楼

吉川 卯之助

游神閣

益子 薫

磯浜本街

武藤屋

篠崎 子之介

肴屋

大里 辰之介

肴屋

大里 喜平

滑川楼

楠木 定蔵

豊後屋

川上 卯之助

而シテ其ノ宿泊料ハ 大洗ニテ六七十錢以上弐円

磯浜本街ニ於テ五六十錢内外 但シ團體若クハ長期間宿

泊者ニ対シテ相当ノ割引アリ